国研紀要153（2019.2）：87-124

〈研究ノート〉

大阪屋号書店小史

湯原　健一

はじめに

「大阪屋号書店」とは、かつて日本統治下の大連に本店を構え、満洲や朝鮮各地に支店を置き、日本の「外地」と呼ばれた地域に一大チェーン店を形成した日本の書籍、雑誌を取り扱う小売書店である。

大阪屋号書店の事業は、日本の外地に巨大なチェーン店網を形成しただけではなかった。東京、奉天、京城を拠点として、満洲、朝鮮各地に存在した大小様々な日本語書籍、雑誌を取り扱う小売店へ書籍供給を行う外地専門の取次書店をも兼ねた。さらに1910年代には、出版業にも進出し、中国、朝鮮、ロシアなど満洲に近接した地域に関する書籍を多数世に出している。

小売、取次、出版と大阪屋号書店は、外地を営業の基盤とし、いわば「書籍販売の総合商社化」を果たすこととなる。しかし、外地に販売網や支店を持ち盤石な企業体制を築いたが、1945年の日本の敗戦により外地に有していた権益をほぼ全て失うこととなる。日本国内に企業としての基盤を持たず、外地での書籍流通・販売に業務的特化を図ったことが、皮肉にも大阪屋号書店の企業活動を終焉に向かわせることとなる。

大阪屋号書店と同様に、日本国内に企業としての基盤を持たず、外地のみに店舗を構え、日本の敗戦と共に姿を消した企業としては、京城に本店を構え、朝鮮の主要都市や満洲国の首都となった新京（現在の長春）に支店を持った三中井百貨店が挙げられる。

三中井百貨店の企業史としては、林廣茂による『幻の三中井百貨店[1]』があり、企業としての発祥から終焉までが明らかにされている。

他方、大阪屋号書店に関しては、渡辺隆宏による「「周辺」の出版流通[2]」、「満配問題[3]」という一連の論考が挙げられる。これらにおいては、満洲国における出版統制を行った国策会社である「満洲書籍配給株式会社」の成立過程を追い、満洲において活動していた大阪屋号やその他書店がどのように配給会社成立を議論し、対応したかを検証している。しかし、日本外地において最大の書店となった大阪屋号書店の成立と発展に関しては、概略が述べられている程度に留まっている。

本稿においては、こうした研究状況を踏まえ、大阪屋号書店の企業として歴史を軸として、その販売網や書籍販売の実態を明らかにし、また、関東州における書籍業の展開、書籍業者たちの実態の検証を行うことを目的とする。

Ⅰ　大阪屋号書店の成立

大阪屋号書店は1904年11月、当時の清国の開港場の一つである営口で開業する。

創業者は濱井松之助という人物である[4]。松之助の息子であり後に大阪屋号書店の専務となる濱井弘（後の講談師・二代目神田山陽）によると、松之助は現在の島根県松江市の「ロウソク屋の伜」として生まれた。若い頃に叔父の口ききで大阪の呉服商で丁稚奉公を勤めた。算術の才能が高かったこともあり、後に「計量技師」の資格を取り、その技能を活かし、「台湾総督府の下級官吏」となった、と記している[5]。

台湾総督府の『職員録』を調べると、「濱井松之助」の名前は1901年か

(1) 林廣茂『幻の三中井百貨店ー朝鮮を席捲した近江商人・百貨店王の興亡』晩聲社、2004年。
(2) 渡辺隆宏「「周辺」の出版流通ー満洲書籍配給株式会社設立への道程、大阪屋號書店その他」『メディア史研究』Vol.27、2010年３月。
(3) 渡辺隆宏「満配問題―九三九年、満洲書籍配給株式会社設立をめぐって」『メディア史研究』Vol.29、2011年２月。
(4) 新聞之新聞社編「東京府「名鑑篇」」『全国書籍商総覧・昭和10年版』新聞之新聞社、1935年、245頁。
(5) 神田山陽『桂馬の高跳び』光文社、1986年、29頁。

ら1904年まで、「臨時台湾土地調査局」に記載がみられる[6]。役職は「測量課技手」となっている。濱井弘が回想録で記した「台湾総督府の下級官吏」という言葉は、この「臨時台湾土地調査局」の「測量課技手」を指していると考えられる。

松之助が勤めた「臨時台湾土地調査局」とは、台湾総督府内に設置された部署である[7]。台湾総督府は1898年に、台湾における地租改正のための土地調査事業を展開する[8]。この調査事業は、台湾における地租徴収の準備作業であり、この調査により確定された地租は、製糖、阿片と並ぶ台湾総督府の財政的支柱となる重要事業であった[9]。

松之助が勤務した「測量課」は、土地調査の測量を行い、それを基に地図の作成などを行う部署であった。「臨時台湾土地調査局」発足当初、技手の定員は40名であったが、土地調査事業の進行に合わせて、人員を増員し、1900年には780名にまで増員されていた。松之助が、勤務した時期は、土地調査事業が拡大し、人員が増員されていた時代であった[10]。

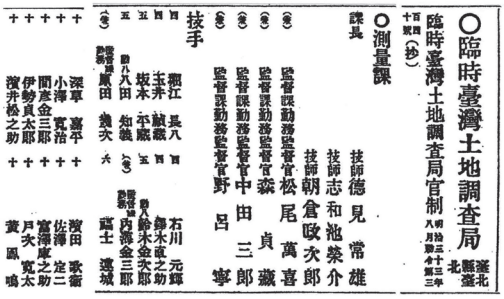

臨時臺灣土地調査局官制（抄）
○臨時臺灣土地調査局
○測量課
課長
技師 德見常雄
技師 志和池榮介
技師 朝倉敬次郎
監督課勤務監督官 松尾萬喜
監督課勤務監督官 森貞藏
監督課勤務監督官 中田三郎
監督課勤務監督官 野呂寧
技手
長八郎
石川元輝
御木直之助
御木金次郎
長谷川謹介
坂本平藏
知久馬
内海金三郎
富士遠城
櫻江玉井
嘉平
深草
小澤寬治
関倉金三郎
伊勢貞太郎
濱井松之助
敬田歌藏
佐澤定二
富澤庫之助
戸矢寛太
黄鳳鳴

写真２：1901年の臨時台湾土地調査局の名簿。
最終行に濱井松之助の名前が見られる

写真１：台湾総督時代の濱井松之助

(6) 中央研究院台湾史研究所データベース「**臺灣總督府職員錄系統**」(http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action)。同データベースによると、1901年、1902年、1904年の３年間に記載があった。なお1902年の『職員録』には「松井松之助」と表記されている。しかし、「松井」の名簿の前後に記載された人名が1901年のものとほぼ同一であるため、これは誤植と推測される。

(7) JACAR Ref.A03020350000「臨時台湾土地調査局官制」(所蔵館：国立公文書館)。

(8) 蔡龍保〈日治初期臺湾總督府的技術人力之招募〉《國立政治大學學報》第35期、2011年５月、77-78頁。

(9) 黄照堂『台湾総督府』教育社、1981年、84-86頁。

(10) 蔡龍保〈日治初期臺湾總督府的技術人力之招募〉89-90頁。

約４年間の台湾総督府での勤務で「当時のお金で千円を貯め」、開戦直後であった日露戦争を好機と捉え、「満洲でひと旗挙げる」ことを決意したという[11]。

周知のように日露戦争は1904年２月に開戦し、翌1905年のポーツマス条約によって終結する。この間に、日本軍は満洲各地を占領下に置き、占領行政を実施するために、各地に軍政署を設置する。1904年４月に安東県に最初の軍政署が設置され、その後の占領地の拡大ともに、金州、大連、鳳凰城、復州、蓋平、営口、遼陽などに軍政署が設置される[12]。こうした日露戦争の推移のなか、松之助は先述のように1904年11月に営口において「大阪屋」を開業することになる[13]。営口が日本軍により占領されたのが1904年７月25日であることから、営口占領直後には、創業の準備をし、満洲へ渡っていたことが窺える。

しかし、この営口において松之助が開業した「大阪屋」は本屋ではなく、雑貨屋であった。大阪屋号書店の社員であった内田勇輔の回想によれば、台湾から戻った松之助は大阪において「即時役だつ日用諸雑貨に重点を置き」準備を進め、手袋や靴下を100ダース、戦勝行列用の「小型ほおづき提灯」を500個などを買い付けていた[14]。

松之助が営口を開業の地に選んだのはなぜか。その理由は残念ながら、息子である弘や内田勇輔の回想録には書かれていない。しかし、当時の情勢からある程度の類推は可能であると思われる。

先述のように日露戦争が勃発して以降、日本は各占領地に軍政署を置き、占領地行政を展開していく。その占領地行政の基本的な方針として、外務省が作成した「占領地施政方針ノ件」がある。「占領地施政方針」によると、日本軍が占領した満洲各地は、それぞれ露国租借地、清国開港場、清国内地に分類され、各地域に応じた占領行政が行われた。営口は、この分類で

---

(11) 神田山陽『桂馬の高跳び』29頁。

(12) 鈴木 隆史『日本帝国主義と満洲』塙書房、1992年、91頁。

(13) 開業当初の屋号は「大阪屋号」ではなく、「大阪屋」であった。「大阪屋」の屋号は、松之助が丁稚奉公をしていた大阪の地名にちなみ命名された。

(14) 内田勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その２」『出版クラブだより』日本出版クラブ、1981年７月10日、198号、４頁。

は清国開港場という区分に分けられた[15]。また、営口には日本の牛荘領事館が置かれるなど、中国国内の海外貿易の窓口のひとつであり、重要な拠点であった。

日本軍占領以降、営口は兵站拠点のひとつとなり、軍需品など物資輸送の拠点となり、活況を呈していく。こうした活況に引かれるように松之助同様にいわゆる「一旗組」とよばれる満洲に好機を求める日本人が集まっていく。当時の営口の居留民は8000人近くおり、一時的な滞在者を含めると１万人を越えていたとみられる[16]。

こうした営口の活況とは別に、遼東半島全体を見ると、次のようなことも分かる。

日露戦争勃発後、1904年５月30日に大連が占領下に入り、金州も前後して日本軍は攻略していく。また同年８月からは旅順攻囲戦が始まり、最終的に旅順が陥落するのは翌1905年１月であった[17]。この間、旅順、大連といった地域は、日本軍とそれに付随した軍関係者以外の渡航は禁止されており、後に満鉄本社などが置かれ、港湾都市として満洲において重要な都市となる大連が、一般人に開放されるのは1905年１月まで待たなければならなかった[18]。

松之助が営口を開業の地として選んだ理由としては、日露戦争の推移により、遼東半島は日本軍の占領下に入りつつあったが、旅順攻囲戦の影響から、まだ安定した状況ではなかった。その点において、営口は開港場であり、日本軍占領以降は兵站拠点となり、そこへ商機を見いだした日本人が集中する場所となっていた。こうした状況が、松之助を営口へと導いていくことになる。

Ⅱ　雑貨商から書籍商へ

1905年１月、旅順攻囲戦が終了し、遼東半島が日本の占領下に置かれる

(15)『日本帝国主義と満洲』91-92頁。清国開港場として指定された他の地域としては、安東県、大東溝、奉天府である。
(16) 小川 和義「営口の史的回顧」『満洲草分物語』満洲日日新聞社、1937年、399-400頁。
(17) 井上 謙二郎『大連市史』大連市役所、1936年、205-206頁。
(18)『大連市史』240頁。

こととなる。これと前後して、日本軍は1904年９月15日に西寛二郎を司令官とする遼東守備軍を編成し、遼東半島全体の軍政を担当させた[19]。戦争は続きながらも、日本軍の占領地となった遼東半島各地には、日本軍による占領行政が着々と始まっていく。

こうした状況のなかで、松之助が創業した「大阪屋」も転機を迎えつつあった。当初、用意していた物資は予想以上に売れ、商品の在庫が払底することとなる。同時に、営口在住の中国人商人との競争が始まると、物資供給や価格競争で窮地に追い込まれていくこととなる[20]。

ここで、松之助は当時、競争相手がまだ少なかった雑誌や書籍販売の分野へ進出していくことを決断する。東京、大阪などの伝手を頼り、雑誌、書籍を取り寄せ、前金取引で販売をした。1905年に日露戦争が終結すると、営口だけでなく満洲各地に、松之助同様に満洲に新天地を求めてやってくる日本人が増加する。また、関東都督府や満鉄が設置されると、各地に図書館や各種の学校が整備されていくこととなる[21]。日本人の増加と教育施設の充実により、教科書や雑誌、書籍の需要が急速に高まり、「大阪屋」の雑誌・書籍販売分野への転進は成功を見ることとなる。

「大阪屋」の書籍・雑誌販売の開始と前後して、当時の日本における出版最大手のひとつであった博文館の満洲視察団が営口を訪れる。この博文館満洲視察団来訪の際に、「大阪屋」は営口における博文館の代理店となることを引き受ける[22]。時期はやや遡るが、1935年に発行された『全国書籍商総覧』によると、大阪屋号書店と取引のあった日本国内の出版社として、博文館、実業之日本社、東京堂、北隆館、三省堂、清水書店、日本出版、駸々堂、岡本書店などが挙げられている[23]。このうち前出の博文館や、東京堂、北隆館は明治より書籍・雑誌を数多く出版していた有力書店である[24]。これら有力書店を背景として大阪屋号書店の書籍、雑誌供給が行わ

---

(19)『日本帝国主義と満洲』92頁。
(20) 内田 勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その２」『出版クラブだより』４頁。
(21)「満洲書籍雑誌商組合略史」『全国書籍商総覧』新聞之新聞社、1935年、1-2頁
(22) 内田 勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その２」『出版クラブだより』４頁。
(23)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』１頁。
(24) 蔡星慧「日本の出版取次構造の歴史的変遷と現状」『コミュニケーション研究』35号、上智大学コミュニケーション学会、2005年、120-122頁。

写真3：『満洲日日新聞』に掲載された大阪屋号書店の広告

れていたことが窺い知れる。

書籍・雑誌への進出成功と日本国内からの書籍・雑誌の供給を確保した松之助は、早くも1906年頃には満洲各地への支店設置に乗り出していく。1907年に創刊された満洲での有力邦字紙のひとつである『満洲日日新聞』に掲載された広告によると、営口永青街に本店を置き、奉天に第一支店、鉄嶺に第二支店、そして本店と同じ営口の花園街に第三支店、遼陽に第四支店があることが記載されている[25]。1904年の創業から約３年で４つの支店を持つまでの成長を遂げていたことが分かる。

しかし、同広告に記載されている営業品目には、書籍、雑誌、文房具に並んで、「夏冬シャツ」や「手袋、靴下」などの商品が挙げられている。この時期の大阪屋は、まだ書籍・雑誌を専門的に扱う店ではなく、雑貨商との兼業に近い形であったと考えられる。

書籍・雑誌販売へと進出した松之助は、かつて丁稚奉公をした大阪や地元の島根などから縁故者を集め、会社組織を拡充を図っていく。『全国書籍商総覧』の「満洲「名鑑篇」」を見ると、後の大阪屋号書店の重要な支店となる大連や奉天、新京（長春）の支店長を務める大谷直定、愛三郎兄弟などの社員も、満洲各地に支店を出し始めた1906年前後に入社していることがわかる[26]。こうした縁故者以外では、松之助自身の兄弟である濱井金次郎やその息子の良などが入社している。また後には、松之助の息子である弘も入社している。金次郎、良の親子は後に大連本店の店長を務め、息子の弘も専務を務めるなど、松之助が家族主義的な経営手法を採っていたことが窺える[27]。

書籍・雑誌販売への進出と会社組織の拡充により、「大阪屋」はその規

(25)『満洲日日新聞』1907年11月３日第61面。
(26)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』1-2頁。
(27)「東京「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』245頁。『桂馬の高跳び』30頁。

模を個人書店から発展させていくことになる。松之助が屋号を「大阪屋」から「大阪屋号」へと変更するのもこの時期だった。

屋号の由来について濱井弘は、事業に対する「志を立てたのが大阪だったので大阪屋」、そして「号」を付けた理由として「そのころ日本商社の屋号には××号というのが多かった」ためと記している[28]。ここで言う「日本商社」とは、いわゆる三井や三菱などの商事会社を指す言葉ではなく、日本人が経営した商店を指すものと思われる。実際、同時期の『満洲日日新聞』の広告を見ると、「丸福号（雑貨商）[29]」、「万松号（貴金属商）[30]」、「徳泰号（建築業）[31]」、「徳昌号本店（雑貨商）[32]」など、屋号に「号」を付けた商店を見つけることができる。個人経営と思われる雑多な業種の商店が屋号に「号」を付けて活動していたことが分かる。松之助もこうした満洲各地における日本人商工業者の活動に沿う形で、屋号を変更したのではないかと思われる[33]。

Ⅲ　大阪屋号書店の大連への進出と関東州における書籍業の展開

1905年９月５日、日露戦争の講和条約であるポーツマス条約が調印される。これにより日露戦争は終結する。そして、遼東半島の先端部分、いわゆる「関東州」の租借権、大連～長春間の鉄道をロシアより獲得することとなる。

日本は、関東州租借地に統治機関である関東都督府（後に関東庁・関東局へ改組）を創設、大連～長春間の鉄道の運営会社として南満州鉄道会社を設置する。

---

(28)『桂馬の高跳び』30頁。
(29)『満洲日日新聞』1907年11月３日第47面。
(30)『満洲日日新聞』1907年11月12日第６面。
(31)『満洲日日新聞』1907年12月１日第６面。
(32)『満洲日日新聞』1907年12月25日第６面。
(33) 出版流通史家の戸家誠によれば、書籍・雑誌を輸入する貿易商として現地人を相手にする場合の取引上の考慮もあったとしている。（戸家誠「幻の「大阪屋号書店」のこと」『文献継承』第18号、金沢文圃閣、2011年４月、１頁。なお『文献継承』は金沢文圃閣の HP（https://kanazawa-bumpo-kaku.jimdo.com/）より閲覧が可能である）

写真４：濱井松之助（左）と弘（右）

営口、奉天、鉄嶺、遼陽と５店舗を展開していた大阪屋号書店も、ついに大連へ進出することとなる。大連は当時、満洲最大の港湾を持ち、また、満鉄本社が置かれるなど、日本の満洲での経済活動の中心地であった。

大阪屋号書店の大連への進出時期について、松之助の息子である濱井弘は、その自伝に詳しくは記していない[34]。また、内田勇輔は「明治四十一年春」に大連浪速町に家賃40円の賃貸契約を結び店舗を開設したと回想している[35]。

残念ながら大阪屋号書店の大連進出時期について、正確な日付は不明である。しかし、当時の『満洲日日新聞』の広告を調べると、おおよその大連への進出時期は推定することは可能である。

先述のように内田勇輔の回想では、大連への進出時期は「明治四十一年」、すなわち1908年であるという。1908年の『満洲日日新聞』の記事を見ると、３月15日に大阪屋号書店の大連店開設の広告が掲載されている[36]。この広告にも、開店の日付の記載はない。しかし、内田の回想とこの広告から推測するに、1908年３月頃には、大連へ出店していたと推定できる。

また、同広告では「書籍及雑誌は東京出版物」を主として取扱い、「内

写真５：『満洲日日新聞』に掲載された大連への移転広告

(34)『桂馬の高跳び』30頁。
(35) 内田 勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その２」『出版クラブだより』
(36)『満洲日日新聞』1908年３月15日第６面。

地定価通り」で販売を行ったと記載されている。当時の関東州（あるいは満洲各地）における書籍、雑誌販売は、定価販売が行われてはおらず、輸送費や手数料といった費用を上乗せして販売されていた[37]。大阪屋号書店は、こうした関東州の書籍販売の商習慣とは異なり日本国内と同じ定価での販売をしていたことが読み取れる。

日本国内との価格の違いは、後に「外地定価」（国内定価の約１割増）として朝鮮、台湾、満洲の書籍商組合の要望により制度化され、国内有力出版社も外地定価設定に応じている。大阪屋号書店もこれに応じたが、満洲国成立後の1938年には、満州国内での書籍供給のために、外地価格撤廃を行っている[38]。

さて、先述した大連店の広告を見ると、大阪屋号書店の店舗体制に若干の変更がなされていることが見て取れる。

前年1907年11月に『満洲日日新聞』に掲載された広告には、営口に本店（永青街）と支店（花園街）が２つあり、奉天、鉄嶺、遼陽にそれぞれ支店を構え、全５店舗の体制であった。しかし、1908年３月に掲載された広告では、営口花園街の支店が表示から無くなっている。また、大連店の広告での表記として「弊本店」という表現が用いられている。従来、大阪屋号書店の本店は、営口永青街にあったが、大連進出に際して、本店を大連へと移していたことが読み取れる。この大連への本店移転により、大阪屋号書店の体制は、全５店舗のままではあるが、大連が本店となり、営口、奉天、鉄嶺、遼陽に支店を置く体制へと変化したことになる。

1908年の大連進出以降、大阪屋号書店は、大連に本店を置き、終戦まで営業を続けることとなる。満洲における支店網は1938年に全国書籍業聯合会が発行した『全国書籍商業組合員名簿』によれば、大連に２店舗（本店が浪速町、支店が連鎖街[39]）、旅順、奉天、新京（長春）と主要都市に配置されており[40]、営口から始まった大阪屋号書店が、満洲各地に「大阪屋号チェーン[41]」を形成していたことがわかる。

---

(37)「幻の「大阪屋号書店」のこと」『文献継承』第18号、１頁。
(38)「満洲国内に於ける外地定価撤廃」『出版通信』出版同盟新聞社、1938年７月24日第19面。
(39) 連鎖街の支店については、後述する。
(40) 目黒甚七『全国書籍組合員名簿』全国書籍業聯合会、1938年、701-709頁。
(41)『桂馬の高跳び』30頁。

写真６：大阪屋号書店大連店

先述の通り、1905年に大連は、日本人渡航が許可される。日露戦争の終結、関東都督府の設置、そして満鉄の開業。これらの日本による関東州統治の開始を告げる事柄は、新天地を求める日本人の満洲流入を加速させていく。

しかし、大阪屋号書店は大連への渡航解禁と同時に、後に関東州の中心となる大連に進出することなく、広告が示すように1908年まで待つこととなる。1904年の雑貨屋大阪屋としての創業から大連進出までに約４年を費やしていたことになる。

大連への進出が1908年となった背景には、渡航許可などの日本人流入を巡る関東州の状況があったと思われる。

日露戦争開始直後の1904年５月30日に、大連が日本軍により占領される[42]。しかし、大阪屋号書店開業の地となった営口とは異なり、大連への渡航許可が決定されるのは、1905年1月のことだった。

この間1904年９月14日に、遼陽以南の軍政事務、兵站等を統督する遼東守備軍が編制される[43]。遼東守備軍は、軍政下に置いた関東州において1904年12月22日「遼東守備軍行政規則」を出し、その管轄地域を「露国租借地」と「露国租借地以外ノ地」とに分けて、統治を実施していく。

「露国租借地」であった関東州は、旅順、青泥窪（大連の旧名）、金州の３つの地域に分けられ、軍政が実施されることとなる[44]。後に関東都督府が設置され、行政機関として民政署が各地に配置されることとなるが、その際の配置も、この３都市であった[45]。その意味で、日本による関東州統治の原型が形成されつつある時期であった。

軍政統治下でのこれらの地域への日本人の渡航は制限され酒保や軍関係

(42)『大連市史』208頁。当時はロシア名「ダルニー」であるが、便宜的に「大連」を用いる。
(43) 外務省条約局編『外地法制誌 第６部 関東州租借地と南満洲鉄道附属地 上巻』文生書院、1990年、34-35頁。
(44) JACAR Ref.C03020250400（第４画像目）「遼東守備軍行政規則進達ノ件」（所蔵館：防衛省防衛研究所）
(45) 関東庁『関東庁施政二十年史』満洲日日新聞社、1926年、20頁。

の商人などの少数の者のみが許されていた。しかし、旅順要塞の陥落により関東州全体が、日本軍の軍政下に置かれたことにより、1905年１月４日「大連湾出入船舶及渡航商人規則」が陸軍省より出され、渡航禁止が条件付ながら解除されることとなる[46]。

渡航解禁に先立ち、遼東守備軍参謀長神尾光臣と大本営野戦経理長官外松孫太郎との間で折衝がなされ、大連に渡航する人員の選別が行われる[47]。

この時選抜された人員は雑貨商や穀物商などから始まり、ホテル、料理店など雑多な職種45種の商工業者たちだった。これらの業種のなかには、当然、「書籍・雑誌新聞商」も含まれており、必要な員数として業者「二戸」が選定されることとなっていた[48]。

1905年５月に遼東守備軍が実施した「大連政区内各種営業者調査」には、残念ながら書籍や雑誌、新聞商を営む者を見出すことは出来ない[49]。しかし、これらの業者のなかに、「雑貨・印刷業」として、小林又七という人物の名前が記載されている。先に示した『全国書籍業組合員名簿』を見ると「小林又七」は大連、奉天に店舗を構える書籍業者として掲載されている[50]。このことから、大連への渡航許可が比較的早い段階において許可された業者であるといえる。

関東州への渡航が厳しく制限され、陸軍や遼東守備軍などが選定した業者の渡航が緩さ入れていた時期に、渡航と開業の許可を取得した小林又七とは何者であるか。

小林又七は東京において「川流堂」という書籍・出版業を営んだ人物である。「川流堂」は先代の小林又七の頃から「兵用図書」の出版を行い、1886年には陸軍省構内における印刷業務を請け負うなどしていた。さらには陸海軍の各種学校の教科書や、陸地測量部の地図などを出版し、軍所在地に代理店を置くなどしていた[51]。

---

(46)『大連市史』240頁。
(47)『大連市史』246頁。
(48)『大連市史』248頁。
(49)『大連市史』256-258頁。
(50)『全国書籍業組合員名簿』702-703頁。
(51) 出版タイムス社編『現代出版大鑑』現代出版大鑑刊行会、1935年、31頁。代理店の販売網は、

「大連湾出入船舶及渡航商人規則」の意図は「将来満洲に於ける我が商権の発展を図る」ものであったが、同時に「戦役中にありては軍事の後方便益にも助成」することが求められた[52]。文字通りの「陸軍御用達」の商業者であった小林は、「我が商権の発展を図る」ための商業者であり「軍事の後方便益にも助成」する存在でもあった。

大連渡航後に小林の代理人が大連軍政署に提出した「居留免状下附願」によると、その資金高は「金一万円」となっており、開業資金として「千円」を用意した濱井松之助と比べるまでもない資金と事業実績を有していた。

大連への邦人渡航が許可された当初において、渡航許可が下りたのは、こうした軍との関係が強い業者が多かった。さらに、大蔵省が選定を主導した「推撰商人」や「指名商人」なども存在し、彼等は日露戦争後の関東州や満洲における経済の日本への影響力を与える監督的役割を担わされた[53]。軍に付随した商人、そして大蔵省が主導した商人たち。それらが蝟集した大連に、大阪屋号書店が入りこむ余地は少なかった。

しかし、日露戦争終結から約３年が経ち、こうした商業者も、営口において濱井松之助が経験したように、在地の商業者などとの競争により姿を消していく。大阪屋号書店が大連に進出した時期は、まさにそうした日露戦争中に進出した業者たちと日露戦争後に進出した新たな業者達の入れ替わりが始まる端境の時期であった。これが大阪屋号書店が大連進出に４年という月日を要した要因のひとつであると推測される。

本店の大連進出を果たした大阪屋号書店であったが、大連における書籍業はどのような状況であったのだろうか。

『全国書籍商総覧』の「満洲「名鑑篇」」には、大連を所在地とする書店は、大阪屋号書店を除くと榮太郎書店、満書堂、小松勉強堂、金鳳堂、多伊良書店、光文閣などの書店が存在していたことがわかる[54]。この内、1910年

京城や龍山など朝鮮半島にまで及んだ。

(52)『大連市史』240頁。

(53) 大蔵省により選定された商工業者は以下の通り。

「推撰商人」：綿糸商・薩摩治兵衛、和木綿、和反物商・長井九郎左衛門、砂糖商・阿部幸兵衛、海産物・渡邉治右衛門、雑貨商・三輪善兵衛、煙草商・江副廉造。

「指名商人」：三井物産会社、大阪商船会社、宅合名会社、代々木商会、山縣勇三郎、谷元道之。（『大連市史』254-255頁）

(54)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』1-13頁。「満洲「名鑑篇」」に掲載されている書店は、

表１：書店主経歴

書店名	店主名	所在地	創業年	店主来歴
大阪屋号書店	大谷愛三郎	新京	1932年	1906年営口大阪屋号書店に入り、鉄嶺支店に15年、本店に４年、旅順支店に４年勤務
大阪屋号書店	大谷　直定	奉天	1922年	大谷愛三郎の弟。大阪屋号書店入店後、大連、鉄嶺支店勤務。1912年東京本店勤務。1919年鞍山支店開設にともない主任となる。1922年鞍山支店を閉鎖し、奉天山陽堂書店を買収し、奉天支店開設。
榮太郎書店	岡田榮太郎	大連	1923年	1901年長崎高等海員養成所卒業。1909年満鉄電機作業所に傭員として入る。1916年職員となり、1923年退社。同年開業。
満書堂	槐　常蔵	大連	1915年	法政大学卒業後、1909年満鉄社員として東京支社より大連へ転じる。1915年満書堂を買収し経営にあたる。
小松勉強堂	小松　圓吉	大連	1920年	1905年大分県師範学校卒業。1913年まで大分県下の小学校校長、実業学校などを歴任し、同年より1920年まで満洲において教職に従事。1920年に小松勉強堂を開業。
厳松堂書店興安社	下野　翠	新京	?	1924年東京の厳松堂へ入店。10年勤務後、現店の主任となる。
金鳳堂	堤　光蔵	大連	1923年	1913年久留米市の金文堂に入店。11年勤務後、２年間公役に就く。1923年独立し、大連にて金鳳堂を創業。
朝日社	栃尾幾太郎	新京	1933年	1907年神戸市山口運輸株式会社新京〔ママ〕支店に入り18年勤務。1923年国際運輸株式会社新京〔ママ〕支店に入るが三ヶ月後に独立。1927年新聞販売業。1933年書籍業を併業する。
能文堂書店	能地榮太郎	撫順	1913年	小学校卒業後、神戸宝文館に入店。３年勤務後、退職し、陸軍御用達を勤める兄を手伝い、秦皇島、天津、北京などを転々とし、天津玉井洋行に入社。1908年同洋行撫順店を預かり、４、５年勤務し独立。1913年書籍業を開業。
大阪屋号書店	濱井　良	大連	1908年	1929年大連第一中学校卒業後、東京巣鴨高等商業に入学、1932年卒業後家業に従事。
多伊良書房	原田　原	大連	1929年	都文館中学卒業後、1905年渡満。営口酒保平岡組に勤務後、満鉄運輸課に入社、1919年まで勤務。同年営口取引所信託に入社、1925年退社。1929年に創業。
文英堂書店	山縣富次郎	旅順	1910年	1908年山口市で山縣屋書店創業、1910年渡満。旅順において文英堂書店を開設、上山松蔵氏の旅順文英堂支店を継承する。
光文閣	山岸　好三	大連	1927年	同店は1927年岩崎卯太郎が創業。山岸が実際の経営を行う。
文榮堂	弓倉　悦蔵	安東	1905年	1905年安東県に赴き、兄が始めた書店にて書店業を習得、同年独立し同地にて文榮堂を創業。

出典：「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』1-13頁。

代に開業するのは満書堂（1915年）のみで、その他は1920年代の創業となっている[55]。

これらの書籍業者のうち、大連での開店時点において書店経営の経験を有していた業者は、金鳳堂の創業者堤光蔵のみである。堤は、佐賀県久留米市の金文堂から独立し、大連で開業をしている[56]。『日本出版販売史』によれば、関東州における主な取次業務を行っている業者として、大阪屋号書店と並んで金鳳堂の名前が挙げられているのは、そうした書店経営の経験や実績によるものであると思われる[57]。

また、「満洲書籍雑誌商組合略史」によれば、大連には、1910年代には、大阪屋号書店と共に、「上山文英堂書店」という２つの有力書店があったと記している[58]。「上山文英堂書店」は、「満洲「名鑑篇」」によれば、旅順に本店を置く、「文英堂書店」として記載されている。

文英堂書店は、1908年に創業者である山縣富次郎が、山口県山口市にお

大連以外には旅順、新京（現在の長春）、撫順、安東などがある。

(55)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』3-4頁。

(56)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』６頁。

(57) 橋本求『日本出版販売史』講談社、1964年、526頁。

(58)「満洲書籍雑誌商組合略史」『全国書籍商総覧』1-2頁。

いて「山縣書店」を開業することから始まる。1910年に渡満し、文英堂書店を開業する。その後、上山松蔵という人物が作った旅順文英堂を継承する。1907年に東京書籍商組合事務所が発行した「全国書籍商名簿」によれば、この旅順文英堂は旅順に本店、大連に支店を構えている。山縣はこの販売網を引き継いだものと思われる。書籍、雑誌、文具などの販売以外にも旅順管内の全学校へ国定教科書の販売を行い発展を遂げる[59]。

文英堂書店の大連への進出時期は、大阪屋号書店とほぼ同じ時期であるが、大阪屋号書店が雑貨商からの転業であったのに対して、書籍・雑誌販売を専門として開業した業者であった。

その他の書店であるが、光文閣の店主・山岸好三の経歴は不明だが、榮太郎書店（岡田榮太郎）、満書堂（槐常蔵）、多伊良書房（原田原）の店主はいずれも元満鉄職員であり、小松勉強堂店主・小松円吉は元教員であった。

大連での書籍業状況を見ると金鳳堂、文英堂書店などのように日本国内で書店経営をすでに経験し、その実績を持って開業する形と大阪屋号書店などのように、書籍販売などとは全く関係の無い分野から起業する形という二つの開業に関するパターンが存在したことが分かる。これは大連の特殊な例ではなく、台湾、朝鮮などの日本人が進出した地域において書店を開業する際の典型であった[60]。

Ⅳ　取次書店化と販売網の拡大

大連に本店を構え、営口、奉天、遼陽、鉄嶺など満洲各地に支店を配置し、大阪屋号書店はチェーンストア化する。『全国書籍商名簿』を見る限り、1907年当時、中国大陸において多店舗展開をしていた書籍販売業者は大阪屋号書店を除くと上山文英堂（２店舗）と東亜書薬局[61]（２店舗）のみであっ

(59)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』11頁。

(60) 日比嘉高「外地書店とリテラシーのゆくえ」『日本文学』62号、日本文学協会、2013年、47-48頁。

(61)「東亜書薬局」は1905年に創設された「東亜公司」を母体とした企業である。資本金は100万円。営業科目として、書籍、薬品、貿易の３つを掲げて、大橋新太郎という人物を社長として、上海、漢口、天津、奉天、済南、揚州などに支店を設けた。（「「東亜公司」の思ひ出」『出版同盟新聞』1943年１月22日第３面）

た。店舗数でいえば大阪屋号書店は満洲最大の書籍販売業者となっていた。

満洲において盤石な地位を築いた大阪屋号書店は、単純な小売書店から満洲各地に多数の取引先をもつ取次書店的性格を持つ書店へとその形態を変化させていく。「満洲「名鑑篇」」に記載された書店の内、大阪屋号書店からの書籍供給を受けていた書店は、榮太郎書店、満書堂、能文堂書店（撫順）、文英堂（安東）などがあり、自社の支店への供給だけでなく他書店への取次を行い、また、その範囲も満洲各地へ広がっていた。

前述の通り、当時の満洲における書籍販売は、日本国内の出版社や取次から書籍の供給を受けていた。この供給を受ける際に、日本国内の価格に送料などを上乗せされた価格で販売を行っており、商売としての「旨味」の少ない業種であったといわれている[(62)]。

取次書店としての役割。そして、販売価格の問題。こうした点を踏まえて、松之助は大阪屋号書店の東京進出を企図する。これは東京へ仕入部を設け、そこを書籍の集荷配送所として満洲各地の支店や取引先へ本を配給する体制を作り上げることを意味した。

1911年に松之助は東京進出を決断し、東京の神田小柳町に書籍の卸しを行う仕入部を設置した。大連本店は弟の金次郎に任せ、自身は家族と共に東京へ移住する。神田小柳町に置かれた卸部は、その後日本橋本石町、北鞘町と移転し最終的に呉服橋通りへと移る。呉服橋の卸部は、日本橋高島屋の付近であり、約100坪の３階建ての建物だったと濱井弘は回想している。土蔵や集荷場が設けられ、二階半分が事務所となっており、住み込みの従業員や通勤の幹部などがそこに詰めていたという[(63)]。ここに大阪屋号書店は、小売書店から外地専門の取次書店となっていく。満洲での小売は大連本店が担当し、東京の仕入部が取次・大阪屋号書店の総本店としての役割を果たしていく。

東京に仕入部を進出させたことにより、大阪屋号書店の販売網は満洲のみならず、朝鮮にまで拡大する。1936年発行の『図書総目録　大阪屋号満鮮卸部常備品』によると大阪屋号書店が取次として書籍供給を行っていた書店は、満洲に67店舗、朝鮮に108店舗、北平（北京）、天津に１店舗ずつ

(62)「幻の「大阪屋号書店」のこと」『文献継承』第18号、１頁。
(63)『桂馬の高跳び』22頁。

写真７：大阪屋号書店日本橋総本店

存在していた[64]。

書籍供給を行っていた書店は、満洲では、大連、旅順、奉天、新京など大阪屋号書店の支店が置かれた主要都市だけでなく、満洲里、黒河、間島、熱河など地方都市にまで存在していた。日本語書籍の供給という面で考えた場合、これら大阪屋号書店が取引を行った書店の一覧は、そのまま在満日本人の活動範囲を表しており、一定規模の日本人社会が存在する場所には、かならず書店が置かれ、日本語書籍や雑誌などの購読が行われていたと言える[65]。

1914年に朝鮮においても大阪屋号書店京城支店が開設される。開店に当たっては『京城日報』の一面下３段を1ヵ月買い切り広告を出すなど大々的な広告が行われたという[66]。

朝鮮における支店は、京城支店のみであったが、取引があった書店は満洲以上の規模であった。また、取引した店の一覧を見ると、三越や三中井などの百貨店などにも書籍を供給していたことがわかる[67]。さらに京城においては丸善の京城支店とも取引があることから、外地専門取次としての大阪屋号書店の強さというものが見て取ることができると思われる。

1932年に創業者濱井松之助が脳出血で倒れると、大阪屋号書店は息子の

---

(64) 濱井松之助『図書総目録 大阪屋号書店満鮮卸部常備品』大阪屋号書店、1936年、3-5頁。

(65) これら書店は書籍・雑誌の販売だけでなく、国定教科書の販売や地方の図書館への書籍供給なども担っていた可能性があった。（日比嘉高「外地書店とリテラシーのゆくえ」50-52頁。）また、これら取引のあった店のうち、商社を意味する「洋行」が屋号に付く店もいくつか存在しており、純然たる書店以外に雑貨店などが兼業として書籍販売を行っていたという実態が垣間見える。

(66) 内田勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その２」『出版クラブだより』５頁。

(67) 三中井百貨店は京城を中心として朝鮮、満洲各地にチェーン展開した百貨店である。日本国内には本部機能のみで店舗を置かず、外地専門の百貨店として発展していく形態は、大阪屋号書店と類似する点もあると思われる。（林廣茂『幻の三中井百貨店』晩聲社、2004年）

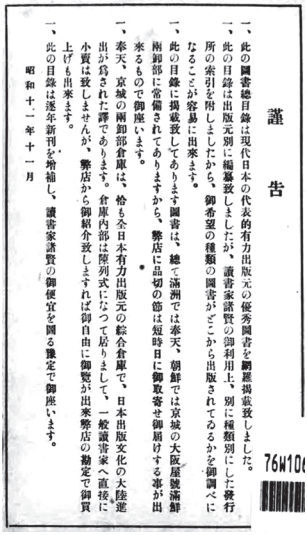
弘の時代となる[68]。

弘は増加する取引先に対応するために、供給を東京総本店に加え奉天と京城にそれぞれ「満洲卸部」と「朝鮮卸部」を開設する。まず「満洲卸部」が1936年８月５日に奉天千代田通に開設される。店舗は250坪の広さを持ち、営業所と常備倉庫が置かれた。「朝鮮卸部」もほぼ同時期に京城明治通に開業している[69]。

大阪屋号書店が発行した『図書総目録　大阪屋号満鮮卸部常備品』の「謹告」によると、奉天、京城の両卸部は「全日本有力出版元の綜合倉庫」であり「日本出版文化の大陸進出」であると強い意気込みが記されている。これら卸部の倉庫内部は、陳列式の書架となっており、発行元別に陳列されていた。個人客への直接販売は行っていなかったが、紹介があれば倉庫内を自由に見ることができ、店舗経由で購入が可能であった[70]。

また奉天、京城以外にも北京に「北支卸部」を新設し、満洲、朝鮮、大陸と日本外地の広汎な地域に書籍供給を行い、大阪屋号書店は満洲国建国後には「満洲国内供給の元締」とまで称されるまでの発展を見せることとなる[71]。

満洲、朝鮮と日本の外地に巨大な販売網を形成した大阪屋号書店であるが、日本が有したもう一つの外地である台湾には、支店を開設した形跡は見つけることはできなかった。沖田信悦によると、大阪屋号書店は1937年に台湾全島の有力書店と共同し「台湾書籍株式会社」を設立し、進出を図った[72]。しかし、



謹告

一、此の圖書総目錄は現代日本の代表的有力出版元の優秀圖書を網羅掲載致しました。
一、此の目錄は出版元別に編纂致しましたが、讀書家諸賢の御利用上、別に種類別にした發行所の索引を附しましたから、御希望の種類の圖書がどこから出版されてゐるかを御調べになることが容易に出來ます。
一、此の目錄に掲載致してあります圖書は、總て滿洲では奉天、朝鮮では京城の大阪屋號滿鮮兩卸部に常備されてありますから、弊店に品切の節は短時日に御取寄せ御届けする事が出來るもので御座います。
一、奉天、京城の兩卸部倉庫は、恰も全日本有力出版元の綜合倉庫で、日本出版文化の大陸進出が爲された譯であります。倉庫内部は陳列式になつて居りまして、一般讀書家へ直接に小賣は致しませんが、弊店から御紹介致しますれば御自由に御覧が出來弊店の勧定で御買上げも出來ます。
一、此の目錄は逐年新刊を增補し、讀書家諸賢の御便宜を圖る豫定で御座います。
昭和十一年十一月

写真８：『図書総目録　大阪屋号満鮮卸部常備品』に掲載された「謹告」

(68) 社長には、松之助の甥に当たる濱井良が就き、息子の弘は専務となった。（『桂馬の高跳び』31頁）
(69)「大阪屋書店満洲卸部開業」『出版通信』1936年８月16日第４面。
(70)『図書総目録 大阪屋号書店満鮮卸部常備品』２頁。
(71)「満洲国内に於ける外地定価撤廃」『出版通信』1938年７月24日第14面。
(72) 沖田信悦『植民地時代の古本屋たち』寿郎社、2007年、163頁。

大阪屋号書店単体としての進出はすることが出来なかった。時代的な問題として、盧溝橋事件の発生とそれに端を発する日中戦争の拡大が、もはや一企業が自由に外地に進出することが容易ではない状況を作りだしつつあったためである。そのため、大阪屋号書店という企業そのものの進出ではなく、共同会社の設立という形を取らざるを得なかったのである。

そして、大阪屋号書店書店を巡る状況も、日中戦争の拡大と共に厳しくなっていく。

Ⅴ　大阪屋号書店の最盛期と終焉

濱井弘によると、大阪屋号書店が最盛期を迎えるのは、満洲事変が勃発した1931年以降であるという[73]。満洲事変の勃発と満洲国の建国により、満鉄社員や満洲国の日系官吏など満洲地域における日本人が増加し、日本語や中国関連書籍の需要が急増したためである。この当時、大阪屋号書店は、満洲国の主要都市に支店を構え、ほぼ全土に取引書店を持ち、書籍の「満洲国内供給の元締」と称されるほどに強固な地位を築いていた。

大阪屋号書店が行った書籍販売には、読み物としての書籍販売と同時に、満州国内、あるいは関東州内での国定教科書の販売が含まれていた。『全国書籍商総覧』に記された大阪屋号書店の教科書販売の実績は、以下の通りである。満洲国内での販売は、新京支店が「新京一円」での国定教科書販売を実施しており、さらに中学、商業学校への中等教科書販売も行っていた[74]。また、奉天支店での国定教科書販売は７校と満鉄沿線を範囲とし、中等教科書販売も２校行っている[75]。関東州内である大連本店においては、国定教科書を15校へ、中等教科書を５校へ販売していた[76]。1928年に大阪屋号書店が出版した秩父固太郎『簡易支那語会話編』[77]は教科書としても採用され、40版を重ねるまでなり、毎期１、２万部の売り上げがあったといわれる。

---

(73)『桂馬の高跳び』47頁。
(74)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』１頁。
(75)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』２頁。
(76)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』９頁。
(77) 秩父固太郎『簡易支那語会話編 注音対訳』大阪屋号書店、1928年。

『関東局施政三十年史』によると、関東州内における日本人教育は、日本国内に準拠した教育が行われ、小学校、中学校、実業学校、専門学校、大学等が設置された[78]。教科書に関しては、日本国内と同様のものを使用しつつも、満洲という特殊な事情に基づき、補助教材、補助教科書が使用されており、1909年に組織された南満洲教育会教科書編輯部編纂のものが使用されていた。満洲事変勃発前1930年から満洲国建国後の1934年までの５年間で、関東州における児童数は１万4753人（学級数、257）から２万0143人（学級数、412）と７割以上の増加をみせている[79]。大阪屋号書店大連本店は、これらの学校に対する教科書販売において、「巨額の販売[80]」を行ったとされており、書籍販売の重要な収入源として教科書販売があったことが窺える。

こうした教科書販売と同時に各地に建設された図書館もまた、重要な「得意先」であったと考えられる。関東州内には、1934年当時、関東州庁による旅順図書館や、大連には満鉄が経営した大連図書館を中心とする図書館が７館あり、金州には南金書院が設立されており、その附属図書館が設置されていた[81]。関東州内に９館の図書館が設置され、28万冊の蔵書があった[82]。これら図書館を中心とした読書推進活動や巡回文庫などの図書館活動も行われるなど、積極的な活動が行われていた。こうした状況を背景として、書籍の売り込みがなされたと考えられる。

また、書籍や教科書などの販売とは別に、雑誌の販売も行われている。大阪屋屋号書店が取り扱っていた雑誌は、大連本店では『文藝春秋』、『中央公論』、『キング』、『オール読物』、『主婦之友』、『婦人倶楽部』、『少年倶楽部』、『少女之友』などが「飛ぶが如き売行」を上げていたという[83]。また、新京支店では大連本店と同様に『中央公論』、『改造』、『キング』、『主婦之友』、さらに『講談倶楽部』、『少年倶楽部』、『少女倶楽部』、『幼年倶楽部』など

(78) 関東局文書課『関東局施政三十年史』関東局、177頁。
(79)「満洲書籍雑誌商組合略史」『全国書籍商総覧』2-3頁。
(80)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』９頁。
(81) 南金書院は1904年、東亜同文書院を卒業し、日露戦争での撫民工作に従事した岩間徳也により創設された中国人教育を目的として学校である。（『東亜同文書院大学史』368-369頁）
(82)「満洲書籍雑誌商組合略史」『全国書籍商総覧』11頁。
(83)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』９頁。

表２：図書館数

	館名	所移在地	経営主体	蔵書数(冊)
1	旅順図書館	旅順	関東州庁	33,363
2	大連図書館	大連	満鉄	189,847
3	日本橋図書館	大連	満鉄	9,267
4	伏見台児童図書館	大連	満鉄	8,971
5	近江町図書館	大連	満鉄	4,186
6	埠頭図書館	大連	満鉄	11,266
7	沙河口図書館	大連	満鉄	13,471
8	南沙河口図書館	大連	満鉄	5,854
9	金州南金書院図書館	金州	南金書院	6,285
			合計冊数	282,510

出典：「満洲書籍雑誌商組合略史」『全国書籍商総覧』11頁。

の売り上げが良好であったという[84]。現在も刊行が続く『文藝春秋』や『中央公論』など総合雑誌の購読が行われている一方で、『主婦之友』や『婦人倶楽部』などの婦人向け雑誌や『少年倶楽部』、『少女倶楽部』などの児童向け雑誌などもよく売れたといわれる。大連、奉天両店での雑誌販売部数は、「平月号で七、八千部」あったという[85]。

大阪屋号書店が顧客とした在満日本人の「家庭婦人の一ヵ月の読書は書籍は別とし雑誌のみで少なくとも五冊は必要であった」という。これは、冬季において日本国内と比べ寒気が強く、外出がままならないためであるのと、日本国内から派遣された官吏や民間企業の社員たちには外地加俸措置が採られていたためと言われてる[86]。

これら雑誌の書名を見る限りにおいて、満洲に暮らした日本人達の読書生活においては、決して日本国内から隔絶したものではなく、輸送や費用等の差はあるものの、日本国内と同様のものを手にすることが可能であったことが垣間見える。

『全国書籍商総覧』の「満洲「名鑑篇」」は結びの部分で、満洲での客層について「満鉄社員、満洲軍、小、中、大学等の教員を最上の顧客」とし

(84)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』１頁。

(85) 内田勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その３」『出版クラブだより』199号、1981年８月10日、5頁。

(86) 内田勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その２」『出版クラブだより』198号、1981年７月10日、４頁。

ていたと記している[87]。しかし、教科書や図書館、雑誌などの購入客として、こうした人々以外に、満鉄社員や教員達に付随した家族や子供達の存在も見落とせないものと思われる。満鉄社員、教員、そしてその家族たち。満洲国建国とそれに伴う日本人の増加を背景とし形成された在満日本人社会に買い支えられ、大阪屋号書店の最盛期が作り出されていった[88]。

こうして最盛期を迎えた大阪屋号書店であったが、直面していた時代は逆風が吹き始めていた。大阪屋号書店への最初の逆風は、まさに大阪屋号書店の足下とも言える満洲で起こる。

1939年、満洲国政府は、満州国内における出版物流通を一元統制するための国策会社である「満洲書籍配給株式会社」（「満配」と略称される）を設立する[89]。満洲国における国策会社とは、政府の監督を受けつつ、特定の業種において独占的な地位を持つ特殊会社である。経済統制のため、原則として一業種一社独占とされ、強い独占力を有した[90]。

「満配」の設立の動きは、前年の1938年頃より始まる。大阪屋号書店は、先述した「外地定価撤廃」で、問題解決に奔走を余儀なくされた時期であった。大阪屋号書店は満州最大の取次書店となっていたことと同時に、1920年に成立した「満州書籍雑誌組合[91]」の常任幹事となっていたため、各地の書店からの陳情が集中していたためである[92]。

「外地定価撤廃問題」において中心となって動いたのは、福家俊一という人物だった。新京において「東光書苑」という書店を経営していたという。濱井弘は、この福家俊一について「後に香川県の代議士もつとめた」人物であると語っている[93]。すなわち、上海の「大陸新報」社長を務め、戦中、戦後と衆院議員を務めた福家俊一であった。

---

(87)「満洲「名鑑篇」」『全国書籍商総覧』13頁。

(88) 教科書、雑誌の他にも、文庫本の売り上げも好調であった。内田勇輔によると大連本店は、文庫本の売り上げ盛京となり、１店舗で扱う許容量を越えたため大連連鎖街に支店を増やし１店舗を増やし、そちらを文庫本専門書店として対応したという。（「ぶらり散歩 私の出版業界 その３」５頁。）

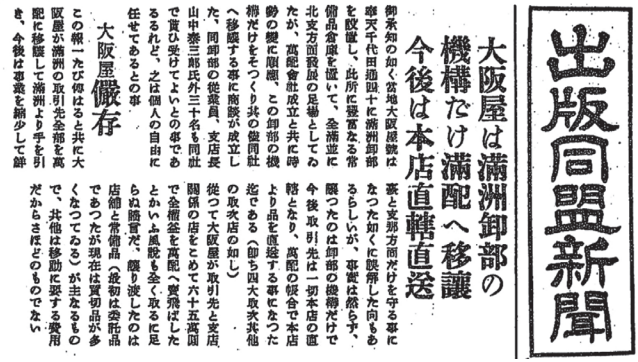
(89) 渡辺隆宏「満配問題」『メディア史研究』Vol.29、2011年、118-119頁。

(90) 岡部牧夫『満洲国』講談社、2007年、72-73頁。

(91)「満洲書籍雑誌商組合略史」『全国書籍商総覧』3-6頁。

(92) 神田山陽「有形財産から無形財産へ わが人生わが辛抱 ささやかな自伝・体験」『出版クラブだより』1981年９月10日、３頁。

(93) 同上。



出版同盟新聞

大阪屋は滿洲卸部の機構だけ滿配へ移讓
今後は本店直轄直送

御承知の如く當地大阪屋號は奉天千代田通四十に滿洲卸部を設置し、此所に發賣なる常備品倉庫を設いて、全滿並に北支方面發送の足場としてゐたが、萬配會社成立と共に時勢の變に順應、この卸部の機構だけをそつくり其の會同社へ移讓する事に商談が成立した、同卸部の從業員、支店長山中泰三郎氏外三十名も同社で貰ひ受けてよいとの事であるれど、之は個人の自由に任せてあるとの事

大阪屋儼存

この報一たび傳はると共に大阪屋が滿洲の取引先全部を萬配に移讓して滿洲より手を引き、今後は書籍を縮少して雜誌と文部方面だけを守る事になつた如くに誤解した向もあるらしいが、事實は然らず、賺つたのは卸部の機構だけで今後取引先は一切本店の直轄となり、萬配の傾合で本店より品を直送する事になつた迄である（即ち四大取次其他の取次店の如し）

從つて大阪屋が取引先と支店關係の店をこめて六十五萬圓で金櫃益を萬配へ賣飛ばしたとかい上風說も全く取るに足らぬ誇言だ、顧り波したのは店卸と常備品（最初は發配品であつたが現在は賣切品が多くなつてゐる）が主なるもので、其他は移動に要する費用だからさほどのものでない

写真９：「外地定価撤廃」を報じる『出版通信』

福家は、外地定価問題を引き起こし、満州の小売書店、日本内地の出版社を巻き込んで「満州書籍雑誌組合」と正面対立する。「満州書籍雑誌組合」も福家の「東光書苑」の除名処分とし、日本からの書籍供給を停止し、廃業へ追い込もうとするほど事態が紛糾する[94]。

そうした外地定価撤廃問題を解決するために、満州国内の書籍供給の取次を廃して、満洲国政府の下に書籍・雑誌の配給会社を作ることを目的として動き始める。1938年７月頃より、「書籍販売会社設立」の推測が流れ、さらに満州国政府の民政部や総務庁、満鉄などが介在し、設立が決定的という憶測が広がり始める[95]。

統制会社設立という事態に、大阪屋号書店も当然のように巻き込まれていくことになる。先述のように1932年に脳出血で倒れた濱井松之助に代わり、会社経営の一端を担った息子の弘は、この問題の矢面に立つこととなる。

後年の弘の回想によると、福家俊一より統制会社設立協力への要請があった際、会社設立後、福家が「関東軍司令部に斡旋して重役」として弘も統制会社の運営に参画できるとの勧誘があったという[96]。このことから、外地定価問題に端を発する「満配」設立騒動は、福家俊一個人の独走によ

(94) 渡辺隆宏「「周辺」の流通」『メディア史研究』vol.27、2010年、101頁。
(95) 渡辺隆宏「「周辺」の流通」『メディア史研究』102頁。
(96) 神田山陽「有形財産から無形財産へ わが人生わが辛抱 ささやかな自伝・体験」『出版クラブだより』３頁。

るものではなく、関東軍、あるいは満洲国政府内部の意を汲んだものであったことが示唆される。また、この段階での統制会社の設立案としては、満洲国政府による国策会社ではあるが、そこに濱井弘も経営に関わるという半官半民的なものであった。

1938年９月、「満配」問題の交渉を行っていた弘は、満州弘報協会理事長で満洲国通信社社長であった森田久から「満州書籍株式会社」の設立案を提示される。それによると満洲国政府が出版部門を担当し、満州国内での「教科用図書」の発売などを行う「満州図書株式会社」が印刷部門を、そして民間出資による配給部門を設立とするものであった。これに対し、弘は政府監督による民間会社の設立を主張し、反対をした[97]。外地定価撤廃問題という満州国内での販売価格の問題を解決するための「満配」問題であったはずが、その内容は、満州国内における出版統制へとすり替わっていた。

そして、満州国内での「満配」設立交渉が具体化するにつれ、大阪屋号書店、そして濱井弘は次第に局外者に追いやられて行く。弘の回想では「従業員の協力で、いろいろな企画書をこしらえ、福家氏を通じて関東軍に差出した」が「いざ人事となると意外にも私は外されていました」という[98]。戦後、会社再建に関心を示さず、講談師神田山陽として、出版界と決別する遠因となったのは、この「満配」問題での失敗であったという。

1940年、「満配」の活動が始まると、大阪屋号書店は奉天に設立した「満洲卸部」を「満配」へ売却させられる。さらに、満洲卸部の支店長、従業員約30名も「満配」へと引き抜かれてしまう[99]。満洲での書籍供給の中枢を失った大阪屋号書店は、東京の卸部からの直接送付のみとなり、取次書店としての機能を大幅に失うこととなる。

さらに追い打ちをかける事態が起こる。1941年６月、日本国内において、満洲国同様に書籍物の出版統制を行う「日本出版配給株式会社」（「日配」と略称される）が設置されると、京城に設置した「朝鮮卸部」を日配朝

(97) 渡辺隆宏「「周辺」の流通」『メディア史研究』105頁。
(98) 神田山陽「有形財産から無形財産へ わが人生わが辛抱 ささやかな自伝・体験」『出版クラブだより』３頁。
(99)「大阪屋は満洲卸部の機構だけ満配へ移譲 今後は本店直轄直送」『出版同盟新聞』1940年３月12日、第１面。

鮮支店に引き継ぐこととなり、事実上吸収されてしまうこととなる[100]。満洲に続き、朝鮮での書籍供給の要が失われてしまい、取次部門の活動が休止に追い込まれて行く。大阪屋号書店についての証言を残した内田勇輔の略歴を見ると、「日配」発足後、彼は日配銀座営業所配給課長になっている[101]。このことから、「満配」設立時と同じく、大阪屋号書店の少なからぬ社員が再び引き抜かれたものと思われる。「日配」成立時、日配への入社を勧められた弘は、「出版業界に煮え湯を飲まされた経験[102]」から拒絶したという。

（1）　出版同盟新聞

（出版研究所報・出版通信・出版文化通信・三紙合同）

出版同盟新聞

大阪屋は滿洲卸部の機構たゞ滿配へ移讓

今後は本店直轄直送

卸部直送お斷り

今後一切本店經由

取次店に取つて萬配の難有味は五日勘定

關東組合は萬配へ便乘

1944年、濱井弘の下へ召集令状が届く。さらに同年４月15日、大阪屋号書店の創業者であった濱井松之助も逝去することとなる。この間、残された出版部門が僅かに出版を行っていたが、「満配」、「日配」という二つの出版統制会社の発足により、取次部門、社員を失い大阪屋号書店は、事実上「解体」されてしまう。

そして、1945年の日本の敗戦により、外地専門の小売・取次書店として発展していた大阪屋号書店は、その基盤となる満洲、朝鮮の店舗と取引書店を失い、企業としての終焉を迎える。

写真10：満洲卸部の「満配」への移譲を報じる『出版同盟新聞』

むすびに

以上、簡単ながら「大阪屋号書店」という外地専門の小売・取次書店と

(100) 内田勇輔「ぶらり散歩 私の出版業界 その３」『出版クラブだより』199号、1981年８月10日、５頁。
(101) 内田勇輔「私の履歴書」『出版クラブだより』1981年４月10日、３頁。
(102)『桂馬の高跳び』108頁。

いう、いささか特異な書籍商の歴史の概略を述べてきた。

日露戦争の最中に創業し、満洲における日本人社会の拡大と歩調を合わせるように、各地に支店を配置していった大阪屋号書店の歴史は、一つの企業史であると同時に、そうした満洲における日本人社会の形成過程に沿ったものである。その意味において、1945年の日本の敗戦とそれに伴う在満日本人社会の消滅により、大阪屋号書店が企業としての活動を終焉するのは、日本国内に企業としての基盤を持たず、満洲、朝鮮への日本語書籍の販売、取次に特化した書店としての社会的役割を終了させたためといえる。

敗戦により企業としての大阪屋号書店は終焉する。しかし、大阪屋号書店が販売し、残された書籍は、敗戦後、満洲に残された日本人にとって引揚げやその日の暮らしの糧を得るための重要な物資となった。長春ではソ連軍、中国共産党軍、国民党軍など統治者が入れ替わった。中国共産党関係者には露和辞典やマルクス、レーニンなどの社会主義関係書籍などが売れ、また国民党関係者には英独仏などの原書がよく売れたという。また、この他にも岩波文庫や講座物、百科事典などが売れ、取り残された日本人の生活の一部を支えることになる[(103)]。

最後に大阪屋号書店の「戦後」について少し触れておく。

1945年の日本敗戦により海外での店舗や取引先を失い、大阪屋号書店は企業としての活動を停止せざるを得なくなる。書籍の供給網や社員を満配や日配に引き抜かれ、会社の屋台骨であった創業者濱井松之助も病没し、その息子の弘や大連本店の店長であった甥の濱井良も召集され敗戦を迎える。

濱井弘は満配や日配との問題で書籍業との決別を決意し、講談師神田山陽として、別の人生を歩み始める。

写真11：講談師・神田山陽となった濱井弘

(103) 沖田信悦『植民地時代の古本屋たち』170-172頁。

一方、甥の濱井良は1947年に品川において出版社として「大阪屋号書店」を再興する。しかし、戦前の大阪屋号書店が満洲やロシアなどの書籍を出版していたのに対して、戦後の「大阪屋号書店」は将棋や囲碁関連の書籍を専門的に出版する書店へと様変わりした[104]。将棋や囲碁は創業者の濱井松之助や息子の弘が趣味としていたもので、戦前においても関連書籍の出版は行われていた[105]。甥の良は、こうしたものを引き継いで戦後の大阪屋号書店の柱としたと思われる。

写真12：戦後、大阪屋号書店を復興する濱井良

しかし、再興された大阪屋号書店も1950年代に廃業しており、戦後における「大阪屋号書店」の歴史も終了することとなる。

本稿では、大阪屋号書店の成立と発展を軸に、関東州における書籍業の諸相について記したが、大阪屋号書店の出版物については触れることはできなかった。また、戦前の出版と不可分である出版物の検閲、とくに植民地における出版物の検閲については触れることはできていない。これら２つの問題に対し、検討を加えることが今後の課題となる。

参考文献

・日本語文献
稲岡勝（2013）『出版文化人物事典』日外アソシエーツ。
井上謙二郎（1936）『大連市史』大連市役所。
岡部牧夫（2007）『満洲国』講談社学術文庫1851、講談社。

(104) 稲岡勝『出版文化人物事典』日外アソシエーツ、2013年、320-321頁。
(105) 戦前の大阪屋号書店の出版物については、国会図書館に所蔵されている出版物一覧を付けた。そちらを参照していただきたい。

沖田信悦（2007）『植民地時代の古本屋たち』寿郎社。
外務省条約局（1990）『関東州租借地と南満洲鉄道附属地 上巻』外地法制誌、文生書院。
神田山陽（1986）『桂馬の高跳び：坊っちゃん講釈師一代記』光文社。
関東局（1936）『関東局施政三十年史』関東局。
関東庁（1926）『関東庁施政二十年史』満洲日日新聞社。
黄照堂（1981）『台湾総督府』教育社歴史新書日本史147、教育社。
出版タイムス社（1935）『現代出版大鑑』現代出版大鑑刊行会。
鈴木隆史（1992）『日本帝国主義と満洲 上巻』塙書房。
大学史編纂委員会（1982）『東亜同文書院大学史 創立八十年記念誌』滬友会。
秩父固太郎（1928）『簡易支那語会話編 注音対訳』大阪屋号書店。
橋本求（1964）『日本出版販売史』講談社。
濱井松之助（1936）『図書総目録 大阪屋号書店満鮮卸部常備品』大阪屋号書店。
林廣茂（2004）『幻の三中井百貨店：朝鮮を席捲した近江商人・百貨店王の興亡』晩聲社。
目黒甚七（1938）『全国書籍組合員名簿』全国書籍業聯合会。

・論文
蔡星慧（2005）「日本の出版取次構造の歴史的変遷と現状」『コミュニケーション研究』第35号。
戸家誠（2011）「幻の「大阪屋号書店」のこと」『文献継承』第18号。
日比嘉高（2013）「外地書店とリテラシーのゆくえ」『日本文学』第62号
渡辺隆宏（2010）「「周辺」の出版流通 - 満洲書籍配給会社設立への道程、大阪屋號書店その他」『メディア史研究』Vol.27。
渡辺隆宏（2011）「満配問題 - 満洲書籍配給株式会社設立をめぐって」『メディア史研究』Vol.29。
蔡龍保（2011）〈日治初期臺湾總督府的技術人力之招募〉《國立政治大學學報》第35期。

・新聞
『満洲日日新聞』
『出版通信』
『出版通信同盟』

・オンライン文献
中央研究院台湾史研究所「台湾総督府職員録系統」
http://who.ith.sinica.edu.tw/mpView.action（2018年７月１日閲覧）
金沢文圃閣『文献継承』https://kanazawa-bumpo-kaku.jimdo.com/（2018年７月１日閲覧）
JACAR Ref.C03020250400「遼東守備軍行政規則進達ノ件」（防衛省防衛研究所）

・写真出典一覧
写真１：台湾総督時代の濱井松之助
内田勇輔（1981）「ぶらり散策 私の出版業界」『出版クラブだより』第198号、４頁。
写真２：1901年の臨時台湾土地調査局の名簿。最終行に濱井松之助の名前が見られる
（1997）『旧植民地人事総覧 台湾編 第１巻』日本図書センター、286-289頁より抜粋。
写真３：『満洲日日新聞』に掲載された大阪屋号書店の広告
『満洲日日新聞』（1907）「大阪屋号」（11月３日）
写真４：濱井松之助（左）と弘（右）
神田山陽（1986）『桂馬の高跳び：坊っちゃん講談師一代記』光文社、口絵より。
写真５：『満洲日日新聞』に掲載された大連への移転広告
『満洲日日新聞』（1908）「大阪屋号」（３月15日）
写真６：大阪屋号書店大連店
内田勇輔（1981）「ぶらり散策 私の出版業界」『出版クラブだより』第198号、５頁。

写真７：大阪屋号書店日本橋総本店
神田山陽(1986)『桂馬の高跳び:坊っちゃん講談師一代記』光文社、口絵より。

写真８：『図書総目録 大阪屋号満鮮卸部常備品』に掲載された「謹告」
濱井松之助（1936）『図書総目録 大阪屋号満鮮卸部常備品』大阪屋号書店、２頁。

写真９：「外地定価撤廃」を報じる『出版通信』
『出版通信』(1938)「満洲国内に於ける外地定価撤廃」（７月24日）

写真10：満洲卸部の「満配」への移譲を報じる『出版同盟新聞』
『出版同盟新聞』（1940）「大阪屋は満洲卸部の機構だけ満配へ移譲今後は本部直轄直送」（３月12日）

写真11：講談師・神田山陽となった濱井弘
神田山陽(1986)『桂馬の高跳び:坊っちゃん講談師一代記』光文社、口絵より。

写真12：戦後、大阪屋号書店を復興する濱井良
新聞之新聞社 (1935)『全国書籍商総覧 昭和10年版 満洲「名鑑篇」』新聞之新聞社、８頁。

表３：大阪屋号書店が取次を行った書店一覧（1936年当時）

No.	所在地	書店名	No.	所在地	書店名	No.	所在地	書店名
1	大連浪速町	大阪屋号書店	61	錦県大馬路	東光堂書店	121	釜山大倉町	三宅本店
2	大連常盤橋	大阪屋号書店	62	熱河省平泉	伊澤洋行	122	釜山大庁町	広文堂
3	大連常盤橋	金鳳堂書店	63	錦州省阜新城内	協和社書籍部	123	釜山大庁町二丁目	二葉屋文具店
4	旅順青葉町	大阪屋号書店	64	熱河省承徳火神廟	東亜公司	124	釜山大庁町	三重出版社
5	旅順青葉町	文英堂書店	65	興安南省王爺廟	佐藤洋行	125	釜山富平町	文盛堂
6	金州赤城町	内海書店	66	熱河省通遼	大安商店	126	釜山弁天町	呉竹堂書店
7	熊岳城日新街	文泉堂書店	67	熱河省赤峰 赤峰ホテル	内山好治	127	釜山草梁町	呉竹堂支店
8	営口新市街	朝日屋書店	68	天津日界松島町	日光堂書店	128	釜山草梁町	松尾商店
9	大石橋中央大街	石文堂書店	69	北平単牌楼門	東亜公司本店	129	馬山都町一丁目	福屋書店
10	海城大街	昌栄堂書店	70	京城本町一丁目	大阪屋号書店	130	密陽	熊本屋書店
11	鞍山北三条	大盛堂書店	71	京城本町一丁目	三越京城支店	131	晋州錦町	十字社書店
12	鞍山赤城町	精文堂書店	72	京城本町一丁目	三中井	132	統営	砂原南門堂
13	遼陽幸町	杉本一心堂	73	京城本町二丁目	丸善京城支店	133	沙里院本町	池園書店
14	遼陽駅南通	金光堂書店	74	京城本町二丁目	日韓書房	134	沙里院	サツマヤ号
15	奉天春日町	大阪屋号書店	75	京城本町一丁目	文光堂書店	135	海州南本町	金池堂
16	奉天浪速通	弘文堂書店	76	京城本町一丁目	金城堂書店	136	海州北本町	高村商会
17	奉天青葉町	正屋商店	77	京城本町二丁目	勉強堂書店	137	平壌大和町	文鮮堂
18	奉天青葉町	三光堂書店	78	京城本町二丁目	至誠堂書店	138	平壌大和町	中村書店
19	奉天青葉町	仁誠堂書店	79	京城明治町二丁目	金剛堂書店	139	平壌本町	三中井支店
20	奉天青葉町	高千穂書店	80	京城鐘路通	博文書館	140	平壌大和町	積文堂書店
21	奉天大東門外	高千穂支店	81	京城鐘路二丁目	徳興書林	141	平壌南町	岡田文祥堂
22	奉天宇治町	誠文堂書店	82	京城鐘路通二丁目	永昌書館	142	平壌旭町	東文堂書店
23	鉄嶺松島町	大和屋書店	83	京城寛勲洞	北星堂書店	143	鎮南浦三和町	至誠堂書店
24	開原大街	十章洞書店	84	京城寛勲洞	東光堂書店	144	鎮南浦龍井町	横野喜商店
25	四平街中央大街	田中洋行	85	京城寛勲洞	以文堂	145	安州	維新書館
26	公主嶺柳町	高取商会	86	京城清進洞	清進書館	146	義州南門外	斉藤商店
27	公主嶺花園町	小久保洋行	87	京城漢江通	蒔田天寿堂	147	義州	稲見商店
28	新京中央通	大阪屋号書店	88	京城元町二丁目	盛文堂	148	新義州常盤町	文明堂
29	新京吉野町	森野商店	89	仁川府宮町	日進堂書店	149	新義州真砂町	大泉書林
30	新京日本橋通	厳松堂書店	90	開城郡松都面北本町	高麗商会	150	新義州常盤町	木三商店
31	新京大同大街	文祥堂支店	91	水原駅前	原田書店	151	新義州老松町	文化堂
32	新京興安大路	多以良書房	92	清州本町三丁目	ハカマダ商会	152	江陵本町	天恩堂本店
33	哈爾濱道裡地段街	千葉書店	93	烏致院吉野町	小野文具店	153	鉄原	五島商店
34	哈爾濱義州街	千葉書店支店	94	公州旭町	藤澤本店	154	春川	佐々木百貨店
35	哈爾濱道裡地段街	哈爾濱堂書店	95	大田本町	鈴木書店	155	咸興軍営通一丁目	昇文堂書店
36	哈爾濱モストワヤ街	岡田書店	96	洪州街	奥村商店	156	咸興軍営通一丁目	丹野商店
37	齊々哈爾永安里	田中洋行	97	金堤本町二丁目	迎田商店	157	咸興東陽里	柿並書店
38	海拉爾中央大街	田中洋行	98	金州大正町三丁目	大正堂書店	158	咸興軍営通一丁目	昇文堂書店
39	満洲里五道街	朝日洋行	99	金州大正町三丁目	是永文具店	159	咸興軍営通	弘文堂
40	黒河興隆街	梅園書籍部	100	金州大正町三丁目	文化堂	160	咸興住吉町	興文堂
41	安東市場通	弓倉文栄堂	101	群山全州通	赤松大正堂	161	興南邑九龍里	咸南堂書店
42	安東大和橋通	昭文堂書店	102	群山明治町	鈴木支店	162	興南邑湖南里	咸南堂書店
43	連山関新町	菱屋洋行	103	裡里	草ヶ谷商店	163	興南駅前	キリンヤ商店
44	本渓湖永利町	弘文堂書店	104	裡里	久保文化堂	164	会寧銀座通	博文堂
45	撫順東四条通	能文堂書店	105	麗水面東町	服部商店	165	会寧面本町	毎朝堂書店
46	山城鎮中央大街	村上洋行	106	光州黄金町一丁目	一二堂書店	166	元山	東書店
47	安東省通化	伊澤洋行	107	光州本町	加賀屋文具店	167	元山南村洞	ウリ書店
48	吉林省敦化	村田洋行	108	光州本町	大岡支店	168	元山広山洞	文化書店
49	間島省図們	栗原書店	109	光州松汀里	細川文具店	169	北青	文化株式会社
50	間島省龍井村	栗原書店	110	光州本町一丁目	阿波屋書店	170	城津南本町	岡本書店
51	間島省延吉	眞藤書店	111	木浦府務安通	文盛堂	171	清津	中屋甚吉
52	吉林大馬路	大和書店	112	木浦	三一書院	172	羅南生駒町	北光館
53	吉林大馬路	芝崎書店	113	求禮邑内	大島屋書店	173	羅南本町	田原新聞雑誌舗
54	濱江省蛟河	井筒洋行	114	大邱元町一丁目	玉村書店	174	羅南本町	沓掛南店
55	濱江省牡丹江	北満堂書店	115	大邱元町	博信堂	175	鏡城梧村	雉城書院
56	濱江省牡丹江	高岡号百貨店	116	大邱東城町	大橋書店	176	羅津	溝口盛文堂
57	佳木斯中央街	旭昇号商店	117	大邱本町	茂英堂書店	177	羅津	三船商店
58	洮南興隆街福永百貨店	田中洋行	118	金泉	立川文泉堂	178	東京日本橋呉服橋	大阪屋号書店
59	白城子中央大街	谷口商店	119	浦項	関屋書店	179	奉天千代田通	同　満州卸部
60	錦州省大孤山大和街	和文堂書店	120	釜山大倉町	博文堂	180	京城明治町	同　朝鮮卸部

出典：濱井松之助『図書総目録：大阪屋号書店満鮮卸部常備品』大阪屋号書店、1936年、3-5頁。

表４：国会図書館所蔵大阪屋号書店出版物一覧

No.	書名	著者	出版年	出版地
1	満洲写真帖	浜井松之助 編	1913年	東京
2	新訳碧巌録	圜悟克勤 原著　蜂谷柳荘 註釈.	1916年	東京
3	世間学	村上浪六	1916年	東京
4	支那の真相	大河平隆光	1917年	東京
5	抽珍朝鮮行政警察法規集	藤沼武男 編	1917年	京城
6	新訳韓非子	野中元三郎	1917年	東京
7	進むべき道	南条文雄	1917年	東京
8	天然生活法	アドルフ・ユスト 著　寒川鼠骨 訳	1917年	東京
9	露西亜に遊びて	大庭柯公	1917年	東京
10	裏門から	関露香	1918年	東京
11	英語の学び方	渋谷新平	1918年	東京
12	菊花培養秘訣	千葉晩香	1918年	東京
13	ゲーリー式の学校	田中広吉	1918年	東京
14	支那語叢談	渡会貞輔	1918年	東京
15	小資本大資本最善運用の秘訣	吉原富三郎	1918年	東京
16	たやすく出来る園芸秘訣	千葉胤一	1918年	東京
17	ダリアとバラの作り方	千葉胤一	1918年	東京
18	東海道中膝栗毛輪講.駿遠の巻	三田村鳶魚	1918年	東京
19	独逸を中心に	赤木格堂	1918年	東京
20	花環、花束、花籠の作り方	千葉晩香	1918年	東京
21	仏教の新研究	上宮教会 編纂	1918年	東京
22	満蒙通覧	福昌公司調査部	1918年	東京
23	月給生活者の副業	小山帰童	1919年	東京
24	最新朝鮮大地図	財藤勝蔵	1919年	東京
25	支那に遊びて	河東碧梧桐	1919年	東京
26	新々支那語会話	石橋梅吉	1919年	東京
27	新々日露会話	エフ・ペ・オブージエフ, 矢野太郎	1919年	東京
28	青年の満鮮産業見物	植村寅	1919年	東京
29	日蓮の勤王主義	野島幾太郎	1919年	東京
30	法華経要義 :天台日蓮対照論述	清水竜山	1919年	東京
31	満鮮遊記	大町桂月	1919年	東京
32	満蒙及支那台湾南洋の経済と植民	牧野義智	1919年	東京
33	関東州司法令集	溝淵孝雄	1920年	東京
34	学校柔道	松岡辰三郎	1920年	東京
35	近代支那史	稲葉君山	1920年	東京
36	現代の外交と国際聯盟	牧野義智	1920年	東京
37	支那経済研究	田中忠夫	1920年	東京
38	新々露語独習	金田常三郎	1920年	東京
39	朔陀羅が子日蓮	田辺善知	1920年	東京
40	鮮満風物記	沼波瓊音	1920年	東京
41	中華三千哩	東亜倶楽部 編	1920年	東京
42	朝鮮語学史	小倉進平	1920年	東京
43	提唱碧巌集.上,中,下巻	中原鄧州	1920年	東京
44	提唱臨済録	中原鄧州	1920年	東京
45	簿記計算法	富中参三郎	1920年	東京
46	間違だらけの衛生	田中祐吉	1920年	東京
47	蒙古見物	真継雲山	1920年	東京
48	欧戦後の支那 :経済と教育	徐世昌 著　楢崎観一 訳	1921年	東京
49	恐ろしき犯罪鑑定夜話	高田杏湖	1921年	東京
50	科学上より観たる霊と肉	田中香涯	1921年	東京
51	義士の真相 :恕軒遺稿	信夫恕軒 遺稿　信夫淳平 編.	1921年	東京
52	現代のフランス	重徳泗水	1921年	東京
53	最近列強経済政策綜攬	寺田雄資	1921年	東京
54	支那陶器新説 :全訳	許之衡 著　渡辺秀方 訳	1921年	東京
55	支那の産業と金融	田中忠夫	1921年	東京
56	支那文化の解剖	後藤朝太郎	1921年	東京
57	処世と倫理	飯塚哲英	1921年	東京
58	新々朝鮮語会話	山本正誠	1921年	東京
59	大連	篠崎嘉郎	1921年	東京
60	南天棒行脚録	中原鄧州	1921年	東京
61	任意男女姙娠論	大塚鼓山	1921年	東京
62	ペンの踊	大庭柯公	1921年	東京
63	英米の少年斥候 :ボーイ・スカウツ運動	保坂帰一	1922年	東京
64	会社会計実務	中西新兵衛	1922年	東京
65	科学的仙術 :健康長寿	田中香涯	1922年	東京

66	株主と重役 ;実務常識	高橋徳太郎	1922年	東京
67	黒柳式ペン自習手本 ;書法説明附	黒柳勲	1922年	東京
68	広告商略 ;販売増進	大塚政晨	1922年	東京
69	支那国民性論	渡辺秀方	1922年	東京
70	支那語警務会話	桜庭巖	1922年	東京
71	支那語文法研究	米田祐太郎	1922年	東京
72	支那料理の前に	後藤朝太郎	1922年	東京
73	商業証券の運用	高橋徳太郎	1922年	東京
74	商業帳簿と其整理法	岩垂至	1922年	東京
75	新々日英西会話	田村浩	1922年	東京
76	聖雄ガンヂー	高田雄種	1922年	東京
77	長城の彼方へ	後藤朝太郎	1922年	東京
78	帳簿誤謬発見と試算表活用法	中西新兵衛	1922年	東京
79	日蓮主義筆陣舌戦	加藤文雄	1922年	東京
80	人間の性的暗黒面	田中香涯	1922年	東京
81	間違だらけの治療	田中香涯	1922年	東京
82	満洲財界の鳥瞰	宝性確成	1922年	東京
83	和文支那訳研究	米田祐太郎	1922年	東京
84	おもしろい支那の風俗	後藤朝太郎	1923年	東京
85	改正営業税法精義	藤沢弘	1923年	東京
86	兜町の話	松尾克己	1923年	東京
87	学術上より観たる怪談奇話	田中香涯	1923年	東京
88	銀行の会計 ;法令対照	岩垂至	1923年	東京
89	最新支那時文 ;附・現行支那関税概論	宮脇賢之介	1923年	東京
90	最新所得税の計算と書式	藤沢弘	1923年	東京
91	支那国民性の解剖 ;附日本と支那	長谷川良之助	1923年	東京
92	支那大未来記	中里右吉郎	1923年	東京
93	支那の経済と財政	木村増太郎	1923年	東京
94	趣味のペン習字帖	黒柳勲	1923年	東京
95	所得税法営業税法はどう改つたか ;旧法対照解説	藤沢弘	1923年	東京
96	女性と愛慾	田中香涯	1923年	東京
97	大聖釈迦	村上實達	1923年	東京
98	台湾大観	椿本義一	1923年	東京
99	天の荘子 ;創作	猪狩史山	1923年	東京
100	乳児の哺育と其看護 ;若き母親の為めに	長尾美知	1923年	東京
101	薄氷を踏みて	沖野岩三郎	1923年	東京
102	白路を見つめて	沖野岩三郎	1923年	東京
103	星は乱れ飛ぶ	沖野岩三郎	1923年	東京
104	保全会社と所得税	藤沢弘	1923年	東京
105	梵文和訳法華経	岡教邃	1923年	東京
106	満洲米作論	岡川栄蔵	1923年	東京
107	模範日露露日会話	スミルニツキー, 吉田薫 著	1923年	東京
108	野球ロマンスバツトの響	安倍季雄	1923年	東京
109	老子の面 ;創作	猪狩史山	1923年	東京
110	生れざりせば ;創作	沖野岩三郎	1924年	東京
111	会社内容の見方	増島信吉	1924年	東京
112	会社法実務篇.株式会社之巻	宮田暢	1924年	東京
113	かな付日英会話	渋谷新平	1924年	東京
114	系統的幾何学問題解法	佐藤三郎	1924年	東京
115	芸術の門	松原寛	1924年	東京
116	渾沌	沖野岩三郎	1924年	東京
117	支那趣味の話	後藤朝太郎	1924年	東京
118	支那書翰文初歩	岡本正文	1924年	東京
119	支那新人と黎明運動	清水安三	1924年	東京
120	支那当代新人物	清水安三	1924年	東京
121	宗教の門	松原寛	1924年	東京
122	小説家志願	石丸梧平	1924年	東京
123	新々日露会話	矢野太郎	1924年	東京
124	貸借対照表作り方と見方	太田哲三	1924年	東京
125	第二野球ロマンスホームラン	安倍季雄	1924年	東京
126	北京風俗問答	加藤鐮三郎	1924年	東京
127	ペン習字の意義及練習法教授法	黒柳勲	1924年	東京
128	満鮮の行楽	田山花袋	1924年	東京
129	黎明期に於ける印度十五傑	高田雄種	1924年	東京
130	煉獄の火 ;長篇小説	加藤武雄	1924年	東京
131	露西亜時代の大連	上田恭輔	1924年	東京
132	愛に甦る ;長篇小説	水守亀之助	1925年	東京

133	怪異草紙	畑耕一	1925年	東京
134	銀価と銀為替	早坂喜一郎	1925年	東京
135	碁と将棋の話	村松梢風	1925年	東京
136	最近の金融経済研究	堀江歸一, 河津暹, 福田徳三 [述] ; 永榮友次郎 編	1925年	東京
137	紫煙	馬場孤蝶	1925年	東京
138	支那童話歌謡研究 :原文対訳	米田祐太郎	1925年	東京
139	上海に於ける外国為替及金融 :附・世界の銀需給及取引事情	吉田政治	1925年	東京
140	新入蜀記	遅塚麗水	1925年	東京
141	時代改称大日本通史	重田象陽	1925年	東京
142	倉庫証券の研究	安河内升	1925年	東京
143	俗諺集解 ;北京官話	鈴江万太郎, 下永憲次 編	1925年	東京
144	超神の創生 ;長編創作,第1編	藤本辰雄	1925年	東京
145	手軽な惣菜向支那料理	李鴻恩, 本田清人 編	1925年	東京
146	哲学の門	松原寛	1925年	東京
147	図書の整理と利用法	林靖一	1925年	東京
148	どんぐり山	沖野岩三郎	1925年	東京
149	日華会話 ;北京官話ローマ字発音付	本田清人	1925年	東京
150	本邦税関及関税詳解	安河内升	1925年	東京
151	満蒙宣傳號 :日満通信創刊第五周年記念		1925年	大連
152	村に襲ふ波	加藤一夫	1925年	東京
153	洋食の食べ方と洋服の着方	横山正男	1925年	東京
154	私は生きてゐる	沖野岩三郎	1925年	東京
155	笑ひきれぬ話	畑耕一	1925年	東京
156	愛慾に狂ふ痴人	田中香涯	1926年	東京
157	イカモノ	三太郎	1926年	東京
158	かなしき仮面	沖野岩三郎	1926年	東京
159	岐路に立ちて	加藤一夫	1926年	東京
160	経済革命と労働銀行運動	長谷川亮介	1926年	東京
161	最新租税法規集	日本租税学会 編	1926年	東京
162	最北の日本へ ;カムサツカ見聞記	伊藤修	1926年	東京
163	サガレン脱走記 ;創作	ウラジミル・コロレンコ 著 ; 関口弥作 訳	1926年	東京
164	サラリーマン論	吉田辰秋	1926年	東京
165	商法熟語新辞典	高橋徳太郎	1926年	東京
166	女禍伝	猪狩史山	1926年	東京
167	鮮満及北支那之産業	藤本実也	1926年	東京
168	千恵子の昇天 ;秘録	和気荘太郎	1926年	東京
169	地方議会の道義化及び地方自治	小原新三	1926年	東京
170	朝鮮親族相続慣習法綜覽	馬場社 編纂	1926年	東京
171	日華親善號 :日満通信創刊第六周年記念特輯		1926年	大連
172	変態心理の人々	南支那及台湾之産業	1926年	東京
173	南支那及台湾の産業	藤本実也	1926年	東京
174	求め得ぬ嘆き	沖野岩三郎	1926年	東京
175	ラクダのコブ	畑耕一	1926年	東京
176	老子の新研究	山県初男	1926年	東京
177	我国金融事情の解説	榊原二郎	1926年	東京
178	我が墓標	水守亀之助	1926年	東京
179	笑と笑の芸術	住谷穆	1926年	東京
180	海外点心記	名倉聞一	1927年	東京
181	会計学原論 ;会計学総論・簿記論	蒲生保卿	1927年	東京
182	銀行貸出事務研究	西垣実	1927年	東京
183	胡適の支那哲学論	胡適 著 ; 井出季和太 訳	1927年	東京
184	最新科学健康と不老	小林杖吉	1927年	東京
185	最新支那地図	西山栄久	1927年	東京
186	産業立国主義と現代社会	桝本卯平	1927年	東京
187	支那財政論	木村増太郎	1927年	東京
188	支那趣味の話　増補版	後藤朝太郎	1927年	東京
189	総督のはらわた	井上收	1927年	京城
190	中庸新註	大川周明	1927年	東京
191	朝鮮法律判例決議総覧	置鮎敏宏	1927年	東京
192	庭球	大江専一	1927年	東京
193	南方革命勢力の実相と其の批判	佐々木到一	1927年	東京
194	変態風俗の研究	田中祐吉	1927年	東京
195	簿記計算法	富中参三郎	1927年	東京
196	漫画の満洲	池部鈞	1927年	東京
197	満蒙の鉄道網	大島与吉	1927年	東京
198	老子と易経との比較研究	山県初男	1927年	東京
199	欧洲御巡遊随行日記	篠田治策	1927年	東京

200	お隣の支那	後藤朝太郎	1928年	東京
201	会社と社員の権利義務	高橋徳太郎	1928年	東京
202	簡易支那語會話篇 :注音對譯	秋父固太郎	1928年	大連
203	現代支那事情の研究	東亜事情研究会	1928年	東京
204	現代女性の消息文 :毛筆ペン	黒柳勲	1928年	東京
205	最新支那地理	西山栄久	1928年	東京
206	趣味の支那叢談	上田恭輔	1928年	東京
207	新体華語階梯	宮脇賢之介	1928年	東京
208	実用商法釈義	湊三郎	1928年	東京
209	実用手形法釈義	湊三郎	1928年	東京
210	大衆医学	森安連吉	1928年	東京
211	地球は曇る	沖野岩三郎	1928年	東京
212	南洋に遊びて	遅塚麗水	1928年	東京
213	排日の秘幕	森宣次郎	1928年	東京
214	満洲金融及財界の現状	篠崎嘉郎	1928年	大連
215	満蒙の産業研究　原料編	田中末広	1928年	東京
216	満蒙の産業研究	田中末広	1928年	東京
217	満蒙の鉄道網　第２版	大島与吉	1928年	奉天
218	旅順戦蹟秘話 :附・営口の思ひ出	上田恭輔	1928年	東京
219	一記者の頭	藤田進一郎	1929年	東京
220	株屋町五十年と算盤哲学	佐藤善郎	1929年	東京
221	近代の陶磁器と窯業	塩田力蔵	1929年	東京
222	工業力学	山本次男	1929年	東京
223	五十年の回顧	朴榮哲	1929年	京城
224	支那経済物語	長永義正	1929年	東京
225	支那国民革命と馮玉祥	布施勝治	1929年	東京
226	支那陶磁の時代的研究	上田恭輔	1929年	東京
227	支那の建築	伊藤清造	1929年	東京
228	西比利亜から満蒙へ	鳥居竜蔵 等著	1929年	東京
229	趣味の大衆科学	田中香涯	1929年	東京
230	証券と投資	島田徳	1929年	東京
231	鉄道功罪物語	松村金助	1929年	東京
232	南島経済記 :附・朝鮮	下田将美	1929年	東京
233	灯を消すな :趣怪綺談	大泉黒石	1929年	東京
234	一人で出来る健康法	石黒憲輔	1929年	東京
235	麻雀の戦術	杉浦末郎	1929年	東京
236	満洲の地方色	田口稔	1929年	大連
237	柚子の種	土岐善麿	1929年	東京
238	案内広告に釣られて	読売新聞社会部 編	1930年	東京
239	囲碁の打方 :初心独習	井上保申	1930年	東京
240	絵解麻雀入門	杉浦末郎	1930年	東京
241	置碁必勝石立集 :自3目至2目	井上保申	1930年	東京
242	置碁必勝石立集 :自9目至4目	井上保申	1930年	東京
243	現代の株式会社	橋本良平	1930年	東京
244	支那陶磁雑談	上田恭輔	1930年	東京
245	将棋新定跡	花田長太郎	1930年	東京
246	将棋定跡講義	将棋新報社編輯部 編.	1930年	東京
247	将棋手ほどき	将棋新報社編輯部 編.	1930年	東京
248	将棋虎之巻	将棋新報社編輯部 編.	1930年	東京
249	倉庫講話	棗田藤吉	1930年	東京
250	貸借対照表の作り方と見方　訂補9版	太田哲三	1930年	東京
251	独仏印華棉花取引所の研究	棗田藤吉	1930年	東京
252	日華麻雀争覇戦 :解説と戦評	杉浦末郎	1930年	東京
253	満洲とはどんな処か	杉本文雄	1930年	東京
254	満鮮趣味の旅	遅塚麗水	1930年	東京
255	名士趣味談	時事新報社政治部 編	1930年	東京
256	李朝風の窯跡と油壺の研究	大宅経三	1930年	東京
257	囲碁の魂一手千盤	高橋清致	1931年	東京
258	囲碁の道しるべ・囲碁定石稽古本 :無疵　2訂	井上保申	1931年	東京
259	囲碁秘訣はめ手千態	中根鳳次郎	1931年	東京
260	置碁石立軌範 :最新講評,九子・八子	中川亀三郎, 岩佐銈 述　囲碁同志会 編	1931年	東京
261	置碁石立軌範 :最新講評,七子・五子・三子	中川亀三郎ほか　述　囲碁同志会 編	1931年	東京
262	置碁石立軌範 :最新講評,六子・四子・二子	中川亀三郎, 岩佐銈 述　囲碁同志会 編	1931年	東京
263	銀行講話	棗田藤吉	1931年	東京
264	黄塵	小日山直登	1931年	大連
265	御城将棋詳解	土居市太郎	1931年	東京
266	最近分類華語新篇	恩霖, 上野巍 共著	1931年	東京

267	最新商業通論	園田藤吉	1931年	東京
268	支那社会の表裏 :附・ポロチン罪悪史	一色忠慈郎	1931年	東京
269	支那文化を中心に	評論随筆家協会	1931年	東京
270	将棋陣立くづし	土居市太郎	1931年	東京
271	初心独習詰将棋講義.上巻	土居市太郎	1931年	東京
272	将棋精選 :新定跡	天野宗歩 著　将棋新報社 校訂	1931年	東京
273	新案詰碁死活妙機	本因坊秀哉	1931年	東京
274	新編将棋実戦講話	土居市太郎 述	1931年	東京
275	定跡奥義将棋秘伝	天野宗歩ほか　口伝　将棋新報社編輯部 編	1931年	東京
276	互先石立軌範 :最新講評	中川亀三郎, 岩佐銈 述　囲碁同志会 編	1931年	東京
277	詰将棋講義 :初心独習.下巻	土居市太郎 編	1931年	東京
278	南華とはどんな処か	森清太郎	1931年	東京
279	南華に遊びて	村松梢風	1931年	東京
280	人間句仏	佐山栄太郎	1931年	東京
281	奉天市街全図	浜井松之助	1931年	奉天
282	名人詰将棋百番	将棋新報社編輯部 編	1931年	東京
283	かなつき日露会話	八杉貞利	1932年	東京
284	外国為替講話	園田藤吉	1932年	東京
285	最新支那地理　訂3版	西山栄久	1932年	東京
286	最新中華民国大地図附大満洲国地図	西山栄久	1932年	東京
287	産業資本主義組織 :特に米国に就て	ジー・ケー・サイモンズ, ジェー・ジー・タムソン 共著　三上正毅, 有馬毅 訳	1932年	東京
288	新京市街全図	大阪屋号書店 製	1932年	新京
289	新国家大満洲国地図	西山栄久	1932年	東京
290	非常時の日本を如何にすべき乎	高須芳次郎	1932年	東京
291	満洲小唄	園山民平 作曲	1932年	大連
292	満蒙の善後策を日華両国民に語る　訂7版	上田恭輔	1932年	東京
293	4気筒8気筒新フオード車の正しき調整及修理法 :修理学の入門書	石川静夫	1933年	東京
294	華語発音字典	権寧世 編	1933年	東京
295	かなつき日満会話	川瀬侍郎	1933年	東京
296	支那骨董と美術工芸図説	上田恭輔	1933年	東京
297	新満洲国見物	高橋源太郎	1933年	東京
298	図解速習自動車の正しき操縦法 :附・コースの考へ方と応用	石川静夫	1933年	東京
299	朝鮮親族法相続法 :主として朝鮮高等法院判例を中心としての考察	藤田東三	1933年	京城
300	図書の受入から配列まで :学校・図書館・諸官公署・会社　再版	林靖一	1933年	東京
301	図書の受入から配列まで :学校-図書館-諸官公署-会社　3版	林靖一	1933年	東京
302	日語指南	川瀬侍郎	1933年	東京
303	満鉄改造論	日笠芳太郎	1933年	大連
304	論語の新研究	北村佳逸	1934年	東京
	小田先生頌寿記念朝鮮論集	小田先生頌寿記念会	1934年	京城
305	かなつき日満露会話	権寧世	1934年	東京
306	原色朝鮮の蝶類	森為三	1934年	東京
307	社交ダンス新編ヴアリエイシヨン	浜井弘	1934年	東京
308	大連商工案内.昭和9年度版	大連商工会議所	1934年	大連
309	羊 :人生と緬羊・緬羊の飼ひ方・ホームスパンの織り方・日満羊を尋ぬる旅	鎌田沢一郎	1934年	京城
310	満洲・支那・朝鮮 :新聞記者三〇年回顧録	楢崎観一	1934年	東京
311	かなつき日露露日会話	吉田薫	1935年	東京
312	現行朝鮮親族相続法類集	南雲幸吉	1935年	東京
313	新選日英米会話	最上梅雄, 渋谷新平	1935年	東京
314	中等電気磁気　修正版	山中新造, 満淵定矣	1935年	東京
315	朝鮮金石攷	葛城末治	1935年	京城
316	東方文化史叢考	京城帝国大学文学会 編	1935年	東京
317	日満俄会話 :袖珍本辞典式	権寧世	1935年	東京
318	満洲国とはどんな処か	清水国治	1935年	東京
319	ラムゼイ夫妻の社交ダンス	加藤教雄, 浜井弘 訳	1935年	東京
320	海外銀行現勢	朝鮮銀行調査課 編	1936年	京城
321	支那陶磁の時代的研究	上田恭輔	1936年	東京
322	大奉天全図	浜井松之助	1936年	東京
323	図書総目録　大阪屋号満鮮卸部常備品	浜井松之助	1936年	東京
324	日満会話五十日	堀井仁	1936年	東京
325	満洲国語読本 :独習速成	白廷賓, 奥村義盛 共著.	1936年	東京
326	支那古陶磁研究の手引	上田恭輔	1937年	東京
327	書簡文要義	石川正, 小西真平 共著	1937年	東京
328	自修支那現代文 :意訳直訳対照	和田正勝	1937年	東京
329	中等無線工学	一色要	1937年	東京
330	図書保管法 :学校-図書館-諸官公署-会社.第1（毀損亡失篇）　再版	林靖一	1937年	東京
331	必携満洲土語解説	川瀬侍郎	1937年	東京
332	ポケツト支那分省地図	西山栄久	1937年	東京

333	大連市全図最新詳密 : 附旅順戦蹟地図		1937年	大連
334	朝鮮巫俗の研究.上巻	赤松智城, 秋葉隆 編	1938年	東京
335	日仏会話 :かなつき	桜井成夫	1938年	東京
336	分類図書総目録.昭和12年7月末現在	大阪屋号書店 編	1938年	東京
337	北京風俗問答	岡本正文 閲 ; 加藤鎌三郎 著	1938年	東京
338	かなつき広東語会話	江川金五	1939年	東京
339	現代の株式会社　増補5版	橋本良平	1939年	東京
340	支那及満蒙の建築	伊藤清造	1939年	東京
341	シベリア経済地理	平竹伝三	1939年	東京
342	新生朝鮮の出発	玄永燮	1939年	京城
343	自修露西亜語文法・会話	八杉貞利	1939年	東京
344	貸借対照表の作り方と見方　訂正増補版	太田哲三	1939年	東京
345	中庸新註	大川周明	1939年	東京
346	朝鮮登記関係法令集	渡辺栄太郎	1939年	京城
347	南支那の産業と経済	井出季和太	1939年	東京
348	蒙古案内記 ;附大同石佛案内記	岩崎雛生	1939年	奉天
349	興亜建設の基礎知識	檜崎観一	1940年	東京
350	支那近世政党史	佐藤俊三	1940年	東京
351	支那骨董と美術工芸図説	上田恭輔	1940年	東京
352	支那陶磁の諸考察	上田恭輔	1940年	東京
353	趣味の支那叢談	上田恭輔	1940年	東京
354	大陸 :随筆	村上知行	1940年	東京
355	日満支経済の基礎知識	木村増太郎 編	1940年	東京
356	日蓮聖人の法華経色読史	蛍沢藍川	1940年	奉天
357	満蒙に関する図書目録		1940年	奉天
358	老子の新研究	山県初男	1940年	東京
359	回教の歴史と現状	加藤久	1941年	東京
360	行の生活	石田外茂一	1941年	東京
361	軍事・日満露会話	権藤正一ほか　共著	1941年	東京
362	現代の株式会社	橋本良平	1941年	東京
363	興亜経済論.蒙疆・北支篇	平竹伝三	1941年	東京
364	皇道と日本学の建設	高須芳次郎	1941年	東京
365	国史精華読本	高須芳次郎	1941年	東京
366	最新支那語解釈法	隅田直則	1941年	東京
367	支那経済地理	西山栄久	1941年	東京
368	支那事変秘史	津田元徳	1941年	大連
369	支那の国内闘争 :共産党と国民党の相剋	佐藤俊三	1941年	東京
370	日露文化叢談	尾瀬敬止	1941年	東京
371	一粒の米を愛する心	山田清三郎	1941年	東京
372	ビルマの歴史と現状	張正藩 著 ; 国本嘉平次 訳	1941年	東京
373	北京の歴史	村上知行	1941年	東京
374	満蒙の民族と宗教	赤松智城, 秋葉隆 共著	1941年	東京
375	南支那民族史	徐松石 著 ; 井出季和太	1941年	東京
376	ロシヤ及ロシヤ人	尾瀬敬止	1941年	東京
377	阿育大王	佐藤俊三	1942年	東京
378	維新留魂録	高須芳次郎	1942年	東京
379	海南島建設論	吉川兼光	1942年	東京
380	ガンジスの流れ	張志澄 著 ; 芳賀雄 訳	1942年	東京
381	興亜経済論.蒙疆・北支篇　3版	平竹伝三	1942年	東京
382	支那を支配するもの	佐藤俊三	1942年	東京
383	支那経済商業辞典	小林幾次郎	1942年	東京
384	支那古今書道通史	麦華三 著 ; 芳賀雄 訳	1942年	東京
385	支那語文法綱要	陳彦博	1942年	東京
386	静の行	石田外茂一	1942年	東京
387	台湾文学集	西川満	1942年	東京
388	中庸新註　3版	大川周明	1942年	東京
389	南方原住民の研究	ヒューラー=ハイメンドルフ, ハンス・ネーヴェルマン 共著 ; 高山洋吉 訳	1942年	東京
390	南方文化論	坂本徳松	1942年	東京
391	北満の樹海と生物	H.バイコフ 著 ; 園部四郎 訳	1942年	東京
392	北方経済論	平竹伝三	1942年	東京
393	満洲風物帖	満鉄鉄道総局旅客課	1942年	東京
394	両漢租税の研究	吉田虎雄	1942年	東京
395	アレキサンドル大王史	柳沢正樹	1943年	東京
396	雲南国境紛争史	張鳳岐 著 ; 種村保三郎 訳	1943年	東京
397	開拓科学生活図説	暉峻義等 編	1943年	東京
398	カムチャツカの歴史	オークニ 著 ; 原子林二郎 訳.	1943年	東京
399	漢文華語康熙皇帝遺訓	魚返善雄	1943年	東京

400	魏晋南北朝租税の研究	吉田虎雄	1943年	東京
401	最低生活費の研究	暉峻義等 編	1943年	東京
402	支那鉱夫の生活	藤本武	1943年	東京
403	支那蚕糸業研究	藤本実也 著；東亜研究所 編	1943年	東京
404	支那税制史.第1,2巻	吉田虎雄	1943年	東京
405	支那美術史.上巻	一氏義良	1943年	東京
406	小学教師倪煥之	葉紹鈞 著；竹内好 訳	1943年	東京
407	清朝末期	中島幸三郎	1943年	東京
408	秦の始皇	村上知行	1943年	東京
409	徐文長物語	周作人ほか　著；橋川浚 編訳	1943年	東京
410	青少年の勤労生活観	暉峻義等 編	1943年	東京
411	大陸行路	檜崎観一	1943年	東京
412	中国の社会風景	柯政和	1943年	東京
413	賃金算定に関する労働科学的見解	暉峻義等 編	1943年	東京
414	南海の驚異	大島正満 編	1943年	東京
415	南方新建設講座	南方圏研究会 編	1943年	東京
416	日露外交史	沼田市郎	1943年	東京
417	北氷洋の気候	ヴェー・ユー・ヴイゼ 著；綜合北方文化研究会 訳	1943年	東京
418	満洲の森林と其自然的構成	村山醸造	1943年	奉天
419	満洲の文化	春山行夫	1943年	東京
420	満洲文化史・点描	千田万三	1943年	東京
421	満農工作記	菅忠行	1943年	東京
422	宮本武蔵五輪書詳解	石田外茂一	1943年	東京
423	モスクワの歴史	伊吹山次郎	1943年	東京
424	シベリヤ民話集	カ・ウェ・ドウブロフスキイ 著；姉川盤根 譯	1944年	東京
425	西洋文化の支那侵略史	E.R.ヒューズ 著；魚返善雄 訳	1944年	東京
426	朝鮮農村社会路査記	鈴木栄太郎	1944年	東京
427	入蜀記：入蜀記・呉船録・桟雲峡雨日記	陸游, 范成大, 竹添井々 共著；米内山庸夫 訳註	1944年	東京
428	満支典籍攷	植野武雄	1944年	奉天
429	満洲に育つロシヤ人の子供	アンナ・キリロウチ・イワシケウイチ 著；姉川盤根 訳	1944年	東京
430	遼律之研究	滝川政次郎, 島田正郎 共著	1944年	東京
431	大陸俳句の作法	大場白水郎	1945年	奉天